
赤銅の墓標

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤銅の墓標

【Nコード】

N0797F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

文明の崩壊した地球。世界は赤銅の大地に覆われ、人々は生きる希望を見失っていた。そんな世界で「何でも屋」を営むティオとロザリオの二人はある日、汽車の中で一人の女性、シトを助ける。彼らの行く末には何が待つのか。世紀末ガンマン伝説。

ブローグ

安っぽいドアベルの音と共にやさぐれた男が店に入ってきた。

マスターはゆがんだ笑みを浮かべると、カウンターに寄っかかり
まるで友人を向かい入れるような口調で話しかけた。

「よう。ダンナ。いい酒が仕入れてありやすぜ。」

しかし男は仏頂面を崩すことなくカウンターの隅に腰を下ろした。
懷に何か忍ばせているのか、いやに重そうな音が店内に響く。

「いつものだ。シュワルツメルセイン。」

マスターはやれやれと表情を落とすと、グラスを取り出し、背後
の棚から古くさい酒瓶を難儀に引つ張り出すと、それに注ぎ込んだ。
ボトルの外見からは想像のできないような薄いバラ色の液体がグ
ラスの中に注がれていく。

「相変わらずあんたに似合わねえ酒でやすな。」

マスターはため息混じりにそれを投げつけるように男に手渡した。
「ふん……。」

男は見事な手さばきでそれを受け取り一口飲んだ。

「その酒にしてもアルビレオとかサジタリウスとかあるんでやすぜ
？ よりもよってメルセインなあ……。なんか思い入れでもあり
やすのかい？」

男はため息をつくと、グラスをおいた。バカに軽い音でそれはカ
ウンターの上にのせられた。

「その質問、これで何回目だ？」

鋭いにらみつけもマスターは自然に受け流し、にやにやと口の端
を持ち上げた。いやみったらしい笑みだ。

「うんにや。覚えてやせんね。何せ物覚えが悪いほうなんで。」

マスターはわざとらしくグラスを磨き始める。

「72回目だ。覚えとけ……。バカ。」

「ダンナは相変わらず物覚えがいいでやすな。」

マスターはそういうとカウンターに寄せられたグラスにボトルに残った酒をすべて注ぎ込んだ。

「その分の金は持つてねえぞ。」

男は素晴らしいながらもそれを飲み干してしまう。

「いえいえ。これはあつしのおごりでさ。別に話を聞かせてほしいなんてこれっぽっちも思つてやせんぜ。」

マスターは相変わらず嫌みな笑みを浮かべていた。

「白々しいんだよ。第一こんな話、聞いたつておもしろくもねえ。」

「いえいえ。この街にはおもしれえことが多すぎやすから。たまにはそういう話も悪くねえんじゃない？」

男はグラスから目を上げた。暗い店中に唯一の光はだらしく垂れ下がった、カビの生えたような電灯のみ。

この店名にぴったりの雰囲気だ。

「月の光の方がまだまだ味があるわな。」

男は曇りガラスを横目に眺めていた。そこには濁った光が映るのみだ。

「そうですかい？」

マスターは特に不機嫌になることなく、相変わらずの笑みを浮かべながらグラスをこすっていた。

「まあ。今夜は思ったより酒の回りが早いみてえだ。酔うと口が軽くなっちゃう。」

マスターはわざと興味を失ったかのような表情でグラスをおいた。

「さて・・・どこから話したもんかな・・・。」

マスターは新しいボトルを取り出し、男の前に置いた。そのラベルにはシュワルツ・メルセインと書かれている。

マスターは無言で栓を抜く。ポン！という小気味のいい音が店中に響いた。

「17年前か。おそらくあれが始まりだったな。」

男は酒の注がれたグラスを手に取り、一気に飲み干した。

「そつえば、ずつとつけてやすね？そのペンダント。何かいわれ

があるもんなんですかい？」

カビの生えたような光に照らされているのは小さな宝石のついたペンダントだった。

今は男の首に無造作にぶら下げられている。

「まあ聞いてる。こいつも、その時に縁のあるもんだ。」

男はポケットから煙草を取り出した。手元には既に灰皿が用意されている。

古くさいオイルライターの放つ光がゆらゆらと揺れる。

「・・・いい夜だったな。本当に・・・いい夜だった。」

吐き出された煙が視界を遮る。

男は目を閉じた。そこに広がる闇。今はただ穏やかな闇が広がるのみだが、あのとき、そこにはいったいどのような闇が広がっていたのだろうか。

「まあ、なんというか。今から考えればあれは・・・宇宙一のバカ野郎どもが奏でる愚曲みてえなもんだったな。」

第一部（１）

マルセイソン歴2016年7月

カタンコトンという音と共に規則的に身体を揺らす振動が近づいてくる。

男・・・ティオ・フリーネスはゆっくりとまぶたを開けた。

「・・・眠っていたのか。」

ティオはずれてしまった帽子を直すと、大きなあくびをついた。

「といつても2時間ほどだけだね。」

前には彼の相棒、ロザリオ・ユニバースが柔和な笑みを浮かべていた。

「そうか・・・。」

ティオは彼からコーヒーを受け取ると、クリームもシュガーも入れずに一気にのどに注ぎ込んだ。

「いまはどのあたりだ？」

ティオは流れていく景色を横目にしながらカップをおいた。

「だいたい、王都マルセイソンに入ったところかな？そろそろビニオンの渓谷を通るはずだよ。」

ロザリオはいつの間にか本を取り出していて、それに目を落としていた。

「お前は眠らねえのか？」

ティオはそばに置いてあった毛布を膝に掛けると窓の枠に肘を乗せた。

「まだ眠くないから大丈夫だよ。」

ロザリオは頁をめくった。ティオは字が読めないのです、それがなんの本なのか分らない。

「相変わらずよく読むよな。あきねえのか？」

「好きだからね。」

ティオは二杯目のコーヒーを自分でつぐと、今度はシュガーを少々入れて、そのまま小さなテーブルにおいた。

「飲まないの？」

ロザリオは相変わらず本に目をおろしていたが、ティオの仕草はすべて分っているらしい。

「さっき飲んだ。」

「冷めるとおいしくないよ。」

「いいんだよ。」

「そう・・・。」

ティオはやれやれとため息を一つつくと。カップを取り上げた。

「お前が飲むか？」

ロザリオはやはり面を上げなかったが、その言葉にはつきりと頷いた。

「ん、ありがとう。」

そういつてカップを受け取ると一口飲んで、顔をしかめた。

「クリームが入っていない。」

相変わらずマイルド好きだな、と思いながらも彼はポケットから煙草を取り出した。

「ここ、禁煙だよ？」

「いいんだよ。誰もいやしねえ。」

ロザリオはまた頁をめくる。

「僕がいるんだけど・・・。」

余った手でカップを取り上げる。今度はしっかりとクリームが入れられている。

「気にするようなもんじゃねえだろう？」

ティオは気にせず、古いオイルライターに火をつけた。

「そりゃ、そうだけど・・・。」

白い煙が車内に漂いつつすらと消えていく。

「第一、今時禁煙車に席を取る奴なんていねえだろ？ 静かでもいいけどよ。」

「安かったからね。」

「ケチくせえな。」

「節約は美德だよ?」

ティオは手持ちの灰皿に白くなった灰を落とす。

赤い光が新たに顔を覗かせる。

「別にため込んだって意味ねえだろうが……。」

「そのうち役に立つよ。」

「どうだかな? いつ紙切れ同然になるかも分らねえってのによ……。」

その言葉を最後に二人は黙り込む。二人ともしばらくの間ただじつと耳をそばだてていた。

「おいでなすったようだね。」

ティオは三本目の煙草を乱暴にもみ消すと箱を大事そうに胸ポケットにしまい込んだ。

「そうだね。」

ロザリオも本を閉じ、ゆっくりとした動作で鞆の中にしまい込み、代わりに黒光りする何かを取り出した。

「伏せた方がいいな。」

「うん。」

二人は座椅子の下にうずくまり息を潜める。すると、なんの前触れもなくドアの蹴破られる音とガラスが粉々になるいやな音が車内に響き、それと共に一人の男が車両に入ってきた。

いや、入ってきたというのは少々語弊があるだろう。この場合倒れ込んできたといった方が適切なのかもしれない。

「……銃弾じゃなくて人だったね。」

ロザリオはそつとそれをのぞき込んだ。

「拍子抜けだったな。」

二人は立ち上がると構えていた右手を下に垂らした。その手の中には黒い銃が握られている。

「どうする?」

「うるさくなるまで放つときゃいいさ。」

「それもそうだね。」

二人はトリガーにかけられていた指をはずすとそのまま席に座り込んだ。

「あの人、息してないよね。」

ロザリオはチラッと横目で男をみた。

「そうだな。」

ティオはいやな予感がした。ロザリオがこういう目をするときには、たいてい何かよくないことが起こる。彼はそれを経験上知っていた。

「死んでいないよね？」

「どうだかな。」

車輪とレールの奏でる振動が次第に強くなっていく。

「銃声はしなかったよね。」

「サイレンサーの音も薬莢の落ちる音もな。」

列車はいつの間にかただっ広い渓谷に進入していた。

「気にならない？」

ロザリオはいつの間にか本を閉じ上目遣いにティオをのぞき込んでいた。

「・・・・・・。」

ティオは”ふう・・・”とため息をつく。

「生きたいんなら正直に言え。のたりくたりしているのは性に合わない。」

ロザリオは不意につこりとした笑みを浮かべ、手に持っていた銃を握りしめた。

「だったら行こうよ。」

「仕方ねえな。」

いやな予感というものはどうしてこうも的中してしまうものなのだろうか。

ティオは面倒くさそうに頭をぼりぼりとかきながら立ち上がると、

ロザリオにやったはずのコーヒーを一気に飲み干した。

「行くぞ。」

「僕のコーヒー……。」

ロザリオは残念そうに殻になったカップを見下ろしていたが、テイオの促しで渋々と席を立った。

二人は男のそばに歩み寄る。

出血はしていない。しかし、よく見ると首筋に青い痣ができている。

「これが致命打か……。」

テイオはそれをまじまじと見つめるとため息をつくように言葉をはき出した。

「死んでるよ……。予想が外れたね。」

「残念だったか？」

「別に。」

二人はさほどの感情も込めずに言い合うとその先……先頭車両をのぞき込んだ。

「思ったより静かだな。」

先に車両に入ったテイオは思わずそう漏らした。

「誰かいるみたいだよ？」

ロザリオは車両の中程を目線でおった。その手の中の銃は既にその座っている二人の人間の方へと向けられている。

「案外既に死んでいたりしてな。」

テイオは警戒しつつも二人の方へと歩み寄っていく。

「死んではないよ。」

そんな声が車内に響いた瞬間、テイオは額に妙な違和感を感じた。

「……くっ！」
ほとんど本能が命じるままに彼は頭をそらせ、横に飛び退いた。
銀色に光何かが彼の真横を通り抜ける。

カスン！と鋭い音をたてながら、それは車両の壁に突き刺さっていた。

それは銀色に光一本のナイフ。明らかにティオをねらって放たれたものだっただ。

「ほう・さっきのゴミとは違うようだ。」

ティオは前を見張る。

いつの間にかそこには一人の男が立ち上がり二人をみていた。ロザリオが向ける銃など目に入っていないといわんばかりに落ち着いている。

「・・・！」

ティオはロザリオがトリガーにかけている指を引き絞るのを感じ取った。

「やめておけ。」

ティオはそんな彼を手で制した。

「だけど！」

「このタイミングではあいつの方が早い。」

ロザリオはしばらくティオをにらみつけたが、あきらめたように銃をおろす。

「ほう、なかなか冷静だな。どうだ？少し話でもしないか？」

男は感心したような表情でティオを見つめた。

「今さっき、自分を殺していたかもしれない奴と話をする舌を持ち合わせてると思うか？」

「会話は既に成立しているようにも思えるが？」

男は余裕だった。その証拠に唇には薄い笑みが浮かび上がっている。

「口が達者だな。まあいいだろう、コーヒーのいっぱいでもご馳走してくれるんならな。」

男は柔和な笑みを浮かべると二人を席に招き入れた。

「今時、禁煙車に席を取る人間が少なくてね。退屈していたのだ。私は煙草というものがどうも苦手だね。煙をみるだけで吐き気がしてしまうのだよ。そもそも煙草というものが未だにこの世に存在していること自体が理解不可能なのであつてな・・・。」

男はなかなか饒舌らしい。

誰も話を促さないうちに自分勝手に話を進めていつている。そのため、二人の興味は男の隣に座っている一人の女性の方に向いていた。

「あんだ・・・名前はなんていうんだ？」

「・・・・・・・・。」

興味本位にティオは話を振ってみるが彼女はキョトンとした視線を与えるだけで何も答えない。

「それは口がきけないのだよ。話しかけても無駄だ。」

自分の話が無視されていることを知った男はとたんに不機嫌になった。

「ふん。それであんたは退屈していたってことか。」

ティオは挑発的に男をみた。

「そういうことだ。」

どうせ、あの男を殺したのはこいつに決まっている。ロザリオはそう結論づけ、その女性に目を向けた。

「????」

彼女はじつとロザリオを見つめていた。

「どうしたの？」

ティオと男の会話を横耳で聞き流しなら彼は彼女に話しかけていた。

「・・・・・・・・。」

彼女は何も言わない。しかし、本当にかすがだが彼女の唇は動いているようにも見えた。

そしてその口が話していたことは・・・。

『タ・ス・ケ・テ?』

ロザリオはティオを見つめた。

「・・・・・・・・?」

ティオは怪訝そうな目で彼を見つめ返すが、すぐに軽く頷き返した。

お前の好きにしる。彼はそういつていたのだ。

「ん？どうしたのだ？」

男はロザリオの変化をめざとく見つけると彼に視線を移した。

ロザリオはその視線に飲み込まれそうになるが、何とか氣力を振り絞って口を開けた。

「彼女を・・・解放してあげてください・・・。」

「なに？」

男の目に殺意が生まれたことは誰の目にも明らかだった。

「彼女を自由にしてあげてください。」

それでもロザリオは食い下がる。

「何をバカな！こいつは私が金で買ったのだ。だからこいつは私のものなのだ。」

しかし、男の威勢はそこで止まる。彼の額にはティオの腕から伸びる銃のマズルがあてがわれていたのだ。

「行こう！」

ロザリオはその一瞬の隙についてその女性に手をさしのべた。

彼女は驚いた顔でティオとロザリオを交互にみた。

ティオはそんな彼女に頷いてみせる。

「・・・！」

彼女はロザリオの手をきつく握りしめた。よく見るとその手にはいくつもの痣が浮き上がっている。

男が彼女をどのような扱いをしていたのか、それはおして計るべくもない。

「行け！」

ティオの一声でロザリオは彼女を連れて駆けだしていた。

「いかせぬ！」

男の手がなびく。しかし、ティオはその先を見据え、トリガーを引いていた。

二つの金属がぶつかり合う音が甲高い音をたてて車内に響き渡る。
「ばかな！」

男は驚愕し、そして戦慄を覚えた。

テイオの放った銃弾は男が投げつけたナイフを空中で粉々に打ち砕いていたのだ。

「目測を誤ったな。本当だったらあんたの方に跳ね返るはずだったが・・・ナイフが脆すぎだな。」

男は恐怖に身体が引きつる思いだった。

こいつは違う。今まで相手にしてきた奴らとは桁が違いすぎる。

男は獰猛な肉食動物に狩られる脆弱な草食動物の思いを味わっていた。

しかし、テイオはそんな男に興味を失い、すたすたと歩いていった。

そして、車両の出口にたった頃、何かを思い出したかのように振り向くと邪惡な笑みを漏らしつつ口を開いた。

「報復ならいつでも受けて立つぜ。奇襲でも寝込みでも何でもOKだ。ただし・・・次は命の覚悟をしてな・・・。」

壊された扉が閉じる音のみが車両に残る。

一人となった男は当方にもない虚脱感に襲われその場に崩れ去るようにつずくまった。

握りしめられた拳にはいつのまにか汗がにじみ出ていた。

「・・・化け物め・・・。」

その声は列車の音にかき消されていった。

(2)

「何とかうまくいったね。」

ロザリオはシトと名付けられた女性にコーヒーを手渡して安堵の笑みを浮かべた。

「無駄弾を使っちゃったがな。」

ティオは銃からマガジンを抜き取り、チェンバー内に装填済の弾を取り出し、マガジンに再度装填する。

そして、鞆のポケットの中から新しい弾を一つだけつまみ出すと、これもマガジンに装填しそのままそれをグリップ内にしまい込んだ。マガジンキャッチのカチッという小気味のいい音を聞くと彼はハンマーを支えながらトリガーを引き、そのままハンマーを元に戻す。この銃にはデコッキングレバーがないのでこの一連の作業をわざわざ自分でしなければ行けない。

「……?」

シトは不思議そうな目でそれを見ていた。

「なんだ？銃がそんなに珍しいか？」

「……。」

シトはこつくりと頷く。

「そうか……。」

シトは口がきけないらしいがコミュニケーションをとるには問題ないだろう。YesかNoか。逆にこっちの方がわかりやすいとティオは思う。

「だけど……大丈夫だった？」

「あの男か？」

「うん……。」

「まあ、女を金で買うようなフラレ男にや俺たちにつきまとうような度胸はねえよ。」

「そうだよね……。」

ロザリオは安心したような笑みを漏らす。

「・・・・・・？」

シトは二人をみながら困惑したようにおどおどしている。自分のことが話題にされていることは分っているのだろうが、それに対してどんなリアクションをしているのか、まったく分らないといった様子だ。

「大丈夫だつてこと。君を縛り付けるものはもうない・・・君は自由つてことさ。」

ロザリオの言葉にもシトはキョトンとした表情を崩さない。

「言葉からだな。まずは。」

ティオは軽く手入れをすませた銃を鞆にしまい込むと思いつきりのびを試みせた。

気がつくと車窓の外には夜のとぼりが早くも漂いつつあった。

「俺はもう寝るぜ。朝になったら起こしてくれよ。」

ティオは毛布を引つ張り出すとシートにごろんと横になった。

「あ。うん。分ったよ。お休み。」

列車の奏でる規則的な振動を肌を感じつつ、ティオは微睡みの世界へと落ちていった。

「それからどうしたんで？」

時計の針は既に日付変更線を越えていた。

男はさらに酒をあおる。すでにそれが何杯目なのかすら覚えていない。

「別にどうもしやしねえよ。後は普通に寝て次の日も順調だった。順調に街に着いたさ。」

マスターはとたんにつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「だけど、女を買ったていうその男ですかい？とんでもねえ奴らに喧嘩を売っちまったもんでげすね。」

「あいつは何もしらねえ世間しらずってやつだ。結局あの後姿が見えなくなっ他と思つたら。窓から飛び降り自殺してやがった。」

「はあ・・まあ、納得いく気もしねえでもねえんですが・・・。」

男はグラスを軽く振ってみた。ゆらゆらと揺れる水面が光を反射し、薄紅色に輝く。

「それで？そのシトって女はいつたい何者だったんで？」

「さあな。その時は何も分らなかった。何せ、あいつは口がきけねえだからよ。」

男はさらに話を続けた。

(3)

ティオはふと目を覚ました。

「……女がいねえな。」

少し早い時間に起きてしまったのか。ロザリオはまだ夢の中にいるようだったが、シトの毛布はもぬけの殻だった。

「まあ。気にすることちゃねえか。」

ティオは朝の風に当たるべく後部者艀に足を運ぶ。

「ん？先客か？」

車輪と線路が奏でる振動のひときわやかましい後部デッキには一人の女性がたたずんでいた。

「なんだ……シトか……」

ティオの声に気がついたのか、彼女は振り向いた。そして、ティオの姿を見つけると安心したような表情を浮かべる。

しかし、ティオは少し困ったような表情を浮かべていた。

列車はかなりのスピードで走っている。だから、当然風がかなり強い。

シトは柔らかで清楚な雰囲気を持つスカートを身につけているわけ……。

「おい、裾を押さえたらどうなんだ？」

「……？」

シトはスカートの裾をつまんでみるが何も分っていないらしく、小首をかしげるだけだった。

「中身が見えてるってんだよ！年頃の女が少しは恥じらいってもんを……。」

ティオはそこまでいうと、はっと気づいた。

「なんでこんなこと言ってたんだ？俺は……。」

「……？」

シトはさらに小首をかしげるとティオじつと見つめた。

「ここはいいから・・・ロザリオを起こしてきてくれ。」

「・・・・・・・・！」

シトはロザリオのなを聞いたとたんに輝かんばかりの笑みを浮かべ、うれしそうに頷くと軽快な足取りで車内に入っていた。

「まったく・・・どうせ、目的地に着いたらお別れだってのに・・・」

「。」「
ティオは煙草を取り出し火をつける。口からはき出される白い煙が風になびいて空に去ってゆくのを眺めながら彼はふと思った。

「本当に・・・お別れなのか？」

ティオはそんな自分の思いを打ち消すように煙草を乱暴に放り投げると足の裏で火をもみ消した。

「バカな。俺は何を考えているんだ。どうかしてるぜ。」
その日は穏やかな夜だった。

「列車の旅つてのはいつもかったるいもんだな。」

プラットホームに降り立ったティオは列車のはき出す白い蒸気を眺めながら呟いた。

「そう？僕は結構好きなんだけど。」

荷物を重たそうに抱えながらロザリオは周囲を見回していた。

「さて。これからどうする？」

二人の後ろで物珍しそうな目で周りを見ているシトをチラッと見ながらティオは煙草をくわえた。

「まずは宿を三人分取って。それから二人で依頼主のところに行こう。」

「まあ、妥当だな。」

二人はそういつて歩き出す。

二人は既にシトが一緒だと言うことに疑いを持っていなかった。

「・・・・・・・・。」

シトは二人の後を見守るようにただその場で立ちつくしていた。
「どうしたの？」

シトがついてきていないことをいち早く気がついたロザリオは振り向いた。

「・・・・・・・・・・？」

シトはロザリオをみた。

「早く来い！時間の無駄だ！」

ティオはため息混じりでシトをみる。

「・・・・・・・・・・！」

三人の視線が混じり合ったとき、シトは今まで以上の満天の笑みを浮かべて二人の方に向かって駆けだした。

「とりあえず宿を取ったら依頼主の前に朝飯だ。」

「うん。そうだね。お腹空いたよ。」

「・・・・・・・・・・♪」

シトもうれしそうに何度も頷く。

三人は霧のたなびく街へと歩んでいった。

(4)

「あんまり美味しいもんじゃねえな。」

安っぽい喫茶店に席を取ったティオは運ばれてきたステーキを口に含んでいた。

「……………」

シトはその向かいの席でサンドウィッチをつまんでいる。

「それはおいしいの？」

そんな彼女の隣でワインを片手にパスタをほおばっていたロザリオはシトの方をのぞき込んだ。

シトは特にまずそうなそぶりをせずに黙々とサンドウィッチを口に運んでいる。

「……………」

シトはそんな風にいう彼らをみて小首をかしげるばかりだった。

「別に関係ねえんだろ？そいつには。」

「関係ない？」

「飯がうまくろうがまずかろうがそんなことはこれから生きていくことへの障害になどなりやしない。そういうこったろうよ。」

ティオはステーキをかみしめた。粗悪でアルコール純度だけがやけに高いワインで作られたソースがのどに焼き付くようだ。

「……………」

みるとシトはサンドウィッチを食べ終わり、食後の紅茶に手を伸ばしていた。その紅茶も飲むものが飲めば思わずはき出してしまいそうなものだというのに。

「ひどいものだよね。」

ロザリオの目には哀れみの光がともっていた。

「どうだかな……。世の中の大半はそんなもんだらうよ。俺たちみたいに何とか成功している人間達は飯が美味しいなど不味いなどいってられる。」

ティオは残ったステーキをともに切らず、強引に口に運び、残った手でワインのグラスをつかんだ。

「……………」

シトはそんな二人をなんの感情ももっていない瞳でみていた。いや、実際はいつも通りの表情をしていたのだろう。しかし、ことさらロザリオにはそんな風に感じられてしまった。

「さて……そろそろ時間だな。」

ティオは懐の懐中時計を取り出し時間を確かめると周りを見回した。

「あ、今回はここで待ち合わせだったんだ？」

ロザリオがそういうのと同時にドアベルの音が店内に鳴り響く。そこには眉間にしわの寄った初老の男だった。

男は店内を一回り眺めると決まった席のように窓際に座った。

「たぶん、あいつだ。」

男がコーヒーを注文したことを確認したティオはそういつて席を立ち上がり周りを気にすることなく男に近づいていった。

「なんじゃ？お主らは？」

コーヒーを片手に男はティオをにらみつけた。

「ロシナンテってのはあんたか？」

「！」

それを聞いた男はさらに険しい表情を見せた。

「お呼びの何でも屋だ。話を聞こうか。」

ティオは促されてもいなかったが、彼の正面に座りコーヒーを注文した。

「今回の依頼主の方ですね？」

シトをつれロザリオも席に座った。

「……お主らが何でも屋か？」

ロシナンテと呼ばれた老人は険しい表情を和らげることなく確認するように言う。

「早速今回の依頼内容を聞かせて頂きましょうか。」

ロザリオは紅茶を二人分注文するとロシナンテの方に向き直った。
「この街の向こう側に大きな山があることは知っているな？」

彼は突然に話を切り出した。

「シルバースター山脈のことか？」

「ああ。一昔前の炭坑が残ってるどころだろう？」

「それが何か？」

かつて、それこそ40年から50年ほど前、この町は炭坑の街と呼ばれるほど石炭の採掘量が多く皆が裕福だった。

しかし、それにも終わりが来る。人々の記憶からは既に消失してしまっただかつての戦争。それは、世界に混沌と災い飢餓、蟻とあらゆる災厄をもたらした。

それによって炭坑の石炭はすべて政府に徴収され戦争の道具とされた。後に残されたのは廃墟となった街と取り尽くされ、空っぽとなってしまった炭坑のみだった。

「あんなところには既に何も無い。そう思ったじゃろう？」

ロシナンテはなめ回すような視線を三人に投げかけた。
ティオとロザリオは素直に頷いた。

「そうじゃろうな……。あそこには既に何も無い。いっだけ無駄じゃ。じゃがな……。」

ロシナンテは肩を落とした。

「だが、あんたにとっては思い入れのある場所だってことか？」

それは、誰から見ても明らかだった。

「儂は……。その坑夫だったんじゃ。」

「そうだったんですか。」

ロザリオは運ばれてきた紅茶を一口飲んだ。まともな入れ方をしてない。湯の温度も葉を引き上げるタイミングもすべていい加減でなんの味つけもない。

たとえ質の悪い葉であつても入れ方次第ではいくらでも美味くなるものを……。

ロザリオはそれ以上は口にすることなくテーブルに静かにおいた。

「儂らはすべてを奪われていった。この街を発展させてきた石炭も。炭坑夫としての誇りも、あげくには家族さえも……。じゃが……。」

ロシナンテは表をあげた。そこには今までの過去に縛られ続けてきた男の影はなかった。

「儂は見つけたのじゃよ。赤く光すばらしい石を……。それがなんなのかは儂には分らん。しかし、それだけは誰にも渡さなんだ。それをみていると不思議と生きていく勇気がわいてくるようじゃった。このゆがんだ世界から飛び立てるような。それをみているだけでそんな意志がわいてくるようじゃった。」

「……。」

シトは冷めた眼差しを目の前の老人に向けていた。

「じゃから儂はそれを密かに隠した。いつか、この戦争が終わり人々に平安が戻ってきたとき、それが何かの役に立つのではないか……。とな。しかし……。」

その表情は再び暗く沈む。

「戦争が終わる前に、儂らの終わりが来た。炭坑は閉鎖され誰にも入れなくなった。今でも自動警備システムとか言うものが動いておって誰も入ることはできん。わしは……。生きる最後の希望を失った。」

それは、まるで本に書かれた物語を朗読するような口調だった。

「……。それで……。その石とやらを俺たちにとってこいと、そういうことなのか？」

結論を急ぐようにティオはロシナンテに確認した。

「その通りじゃ。」

自分の言いたいことは統べていったのか、別段嫌そうな顔もせず、に彼は頷いた。

「使われなくなつて50年近くたった炭坑で、しかもそこには旧世代の見境のない警備システムがうようよと徘徊している……。これは……。結構やつかいだよ。」

ロザリオは老人が言った話の内容を要約するようにメモ帳に記入していた。

「リスクはつきものってやつだ。だけど、リスクに似合うリターンは望めるんだろうな？」

ティオはにらみつけるようにロシナンテの表情を伺った。

「僕の隠した赤い石をお前らにやろう。」

「？それをとってくるのが俺らの仕事だろう？」

ティオは怪訝な顔をした。

とってこいと依頼されたものが報酬では本末転倒ではないか。

「僕はそれを一目見ればそれで十分じゃ。初心忘るべからずとはよく言ったものじゃが初心帰るべからずとは僕の持論なのでな。あのころの記憶は大切じゃが、それにすがっていてはなんにもならん。ただ、それだけのこと……。」

果たしてそれだけのことなのだろうか？ティオはロシナンテの心の内を読もうとしたが、顔に張り付いた表情にはなんの感情もこもっていない。

「しかし、その石はそれほど価値のあるものなのですか？」

ロザリオはおずおずと聞いた。

ある意味この質問はこの老人の尊厳をいたく傷つけるものだったのかもしれないが、仕事は仕事と割り切らなければならない。

「後から調べて分ったことじゃ。あれには間違いなく莫大な価値がある。フレストーンというものを知っておるか？」

「太陽の原石？…….というと、戦後、各地の国家政府が血眼になつて探したって言うあれか？」

ティオは驚愕の眼差しを露わにした。

「ティオ…….知ってるの？その何とかストーンって言うの。」

「まあ、少しあってな。当時だったら握り拳ほどの大きさで小さな街一つまるごと買えるほどの価値があつたって代物だ。」

ロザリオは「ふへ？」と間抜けな声を漏らした。

「街一つまるごとだって？…….見当がつかないな……。ようは、

土地を買収できて、さらに住民に立ち退き料を払えるほどのものだろう……。？だめだ、わかんない……。」

「まあ、それぐらい訳の分らん金が舞い込んでくるような代物だ。」

ティオはため息をつくように言うと、

「どうする？受けるか？この依頼。」

そのままロザリオとシトを見た。

「……………」

シトは相変わらず今の状況を把握できていないようだが、ロザリオは真剣に悩んでいる様子だった。

「……受けよう……。」

その空白は5分ほどだっただろうか？少なくともリンゴの皮をむくだけの時間は経っていたと思われる。

「いいのか？すっげえ危険だぞ？」

「危険は……。慣れっこだろう？それに……。」

「それに？」

二人はお互いの瞳をにらみつけあう。

「フレアストーンというのはとても興味深いよ。」

ティオは脱力するようにため息をついた。

「だよなあ……。お前ならそういうよなあ……。」

「ティオだって……。そうでしょ？」

見るとロザリオは先ほどとはうってかわって、いたずらっぽい笑みを浮かべている。

「ま、違ういな……。」

「それでは……。」

ロシナンテは二人を交互に見回した。

「ああ。受けてやるさ。どちらにせよそのために来たわけだし、他に抱えている依頼もないしな。」

いつの間にかティオの顔にもいたずらを思いついた子供のような笑みが浮かび上がっていた。

「すまない……。」

ロシナンテは深々と頭を垂れた。

「面を上げてください。むしろ僕たちの方が感謝するべきです。」

「??」

ロザリオの言葉にロシナンテは困惑気味だった。

「なぜなら、僕たちに仕事と冒険を与えてくださったのですから。」

ロザリオのニツコリとした笑み。それは見るものに安らぎを与えるような柔らかな笑みだった。

「さて。まあ、そういうことだからまかしときな。」

ティオは不味い紅茶をぐいっと飲み干すとおもむろに立ち上がった。

「マスター！勘定だ！」

そついうと店の奥から小太りの女性が顔を出した。

「全部で78メラスだよ。」

いかにもな口調でそう告げる。ティオは僅かに肩をすくめると小汚い財布を取り出し、78メラスを支払った。

「味の割にはけっこうたけえんだな。」

ティオは冗談のつもりだったのだが、その女性はティオをにらみつけると乱暴に代金を奪い取ると奥の方へ引っ込んでいった。

「・・・冗談の通じない人みたいだね。」

ロザリオはそんな彼を見ながら肩をすくめた。

「・・・・・・」

シトもなぜかうれしそうにしていた。

「さてと。それじゃあロザリオは買い出しを頼むぜ。今回は山登りをするつもりだ。」

店から出た三人にすっかりと天高く登っていた太陽が照りつけ、ティオはまぶしそうに目をしかめた。

「うん。分った。ティオは？」

「俺は武器の調達だ。」

「分った。じゃあ、お互いに用事が済んだら宿屋に待ち合わせってことで。」

「そういうことだ。それと・・・気をつけるよ？」

ティオは少し声を潜めた。ロザリオは既に承知しているという仕草で、

「うん。さっきから見られているよね。」

「ああ。俺たちに気配を察知されるぐらいだからさほどでもないが・・・素人ではねえな。」

二人はまったくその体勢も表情も変えていないため、端から見たら先ほどの話の続きをしているように見えるだろう。

正直二人は、これが通用する相手であることを祈っていた。

「・・・・・・？」

当たり前のように事態を把握できていないシトは二人を困惑したかのような表情で見ていた。

「シトはお前に任せる。せいぜい街の案内をしてやんな。」

「うん。分ったよ。ティオもあまり寄り道と無駄遣いはしちやだめだよ。」

ようやく普段の口調に戻った二人はそのまま二手に分かれた。

「さてと・・・やっかいな仕事になりそうだぜ・・・。」

昼近くだというのに妙にがらんとした街並みを見回しながらティオはポケットに左手をつっこみながら、ゆったりとした歩調で歩いていった。

(5)

この街にある雑貨屋といえば町はずれの”イスフェル”という店しか思い浮かばない。

ロザリオは少し遠出を覚悟しながらも街の大通りを歩いていった。誰からかの監視を受けているにもかかわらずなぜ大通りを通るのか。

それは、その広さを生かして周りの状況を把握しやすくするためだ。

大通りでの行動は目立ちすぎる。そのため、自然と襲われにくくなるというのが理由なのだが。

「だけど・・・落ち着かないよね・・・。」

「・・・？」

ロザリオの漏らしたため息にも似た言葉にシトは小首をかしげるばかりだった。

「こんなにおおっぴらに監視されると・・・逆にやりにくいっていうか。」

ティオはわざと踏んづけてほどけた靴ひもを結び治すため、地面にうずくまり、周りの様子に気を配った。

(2 / 3人・・・グループを組んでいるってことかな。一人は後方20メートル。二人目は裏路地を逝ったり来たりしているし。最後は・・・一人目のさらに後方か。)

ロザリオは靴ひもを結び治すとゆっくりと立ち上がった。

ジャケットのポケットにつつまれている右手には既に愛用の銃、フォールンヴェスパM93が握られている。

ティオほどではないが、彼もそれなりに銃の腕には覚えがある。おそらく、いま彼を監視している程度のちんぴらなどは彼の足元にも及ばないだろう。

逆に言うと、ティオが明らかに人間離れしているのだろうが・・・

。

（ちんぴらって言っても素人ではないんだろうけど。）

少し距離を詰めてきたようだ。

（アタックの予兆かな？）

彼は後ろを見ずにそう予感した。

こういつときに現われる一種独特の感覚。緊張感ともとれるようなものが空間を支配する。

（本当に・・・麻薬みたいなものだよね。）

次第に高鳴ってくる心臓の鼓動を心地よさそうに耳に受け、彼は薄く微笑んだ。それは、獲物を前にした猛獣が浮かべるような邪悪にして物静かな笑みだった。

「そろそろ頃合いかな？」

ロザリオはそう思い立ちシトを先頭にするように裏路地に潜り込んだ。

ティオの耳、身体を通して追跡者の足音が伝わってくる。彼が裏路地に入り込んだことを受けて急に歩調を強めたのだろう。

裏路地を逝った来たりしていた男の一人も次第に近づいてくる。

どうやら、この男の方が早く来そうだ。

「先手必勝だとおもう？」

ロザリオはシトに聞いた。

「・・・・・・？」

彼女は言葉の意味すらも理解できなかったのだろう。しかし、ロザリオはかまわずにジャケットのポケットに忍ばせてあった右手を取り出した。

そこには何も握られていない。

「ねえ。シト？僕が合図したらこの十字路をまっすぐと向こうに向かって駆けていくんだ。よそ見もしちゃいけない。後ろを振り向いても行けない。ただこのまま走っていくと広場に出ると思う。噴水のある広場・・・今は水は出ていないだろうけどね・・・そこで待っていること。いいね？」

ロザリオは静かにゆつくりとシトに言い聞かせた。

「……!!」

シトはようやく自分たちが立たされている状況がただことではないことを理解したようだ。

彼女はゆつくりと頷き返す。

「うん。いい子だ。」

ロザリオはシトの肩をぽんぽんと叩いてニッコリとした笑みを彼女に向けた。

「……。」

シトは思わず驚いた表情を彼に返すが、それは次第に薄い笑みに変わっていった。

「さてと……タイミングが大事だね。」

彼は、小さな十字路にの一角に身を潜めた。

足音は予想通りの早さを保ち接近している。

「よし……いまだ。いくんだ!」

「……!!」

その言葉とシトが駆け出すタイミングは絶妙にマッチした。

「……うお?」

シトがいきなり飛び出てきたため、ロザリオをおっていたものの一人は面くらい、次の瞬間自分が立たされている状況が完全に見えなくなってしまった。

「ごめんなさいっ!!」

振り下ろされる拳に気がついたそれは避ける暇もなく、あごに食らって悶絶した。

「後二人か……」

少し強く叩きすぎた右手をさすりながらティオは十字路の向こう側を見た。狭い路地の中、シトはどんどん小さくなっていく。

「いいね。結構早いじゃん。」

「なにがあった?」

ふと気がつくと後から追いかけてきた二人がようやく追いついた

ようだ。

「遅いお着きだったね！」

言い終わるか言い終わらないか。地面に倒れ込む仲間とロザリオを見比べ、状況を理解するのが明らかに遅すぎた。

「ド素人ちゃん」

すべては一瞬で片が付いた。一瞬にしてロザリオの拳は二人の男のみぞおちと脇腹に吸い込まれるように入っていた。

地面に倒れ込む二つの巨体。

「思ったより大男だったんだ。」

気配は察していたがさすがに体格までは把握できていなかった自分を思わず悔やんでしまうが、ロザリオはことのほか冷静であった。「さて、次の追っ手が来ないうちに僕たちのお姫様を迎えに行ななくちゃね。」

ロザリオの口調は楽しくて仕方ないといった感じだった。まるで、遊びに興じる子供を思わせるようなその無邪気な表情はいつたいなんなのだろうか？それは、ティオとロザリオが今まで踏み越えてきた修羅場を物語るものだった。

その後、ロザリオの予想通りに次の追っ手がやってくるが、悶絶した三人を見て、おっていたロザリオとシトを見失ったことを知り歯ぎしりしたことは言うまでもない。

(6)

「・・・・・・・・！」

狭い路地。暗い路地。聞こえるのは自分の足音と荒い息づかい。なぜここにいるの？私はなぜここにいるのだろうか？

シトは走りながらもそんなことを考えていた。

最初に出会った人は一見物腰が穏やかそうな人だったが、自分とは合わないと分ると手のひらを返したように攻撃的になる人だった。

ただ自分は笑うか無表情に彼の言葉に頷いているだけでよかった。その人は言っていた。私はその人のお金で買われたものだから、その人のものなのだって。

私は何も思わなかった。別に私を殺したりするわけではないのだから。時たま私が彼の意にすぐわなない表情をするとひどく殴りつけた。飽きたときのために値下がりすると行けないから顔はぶたなかった。

私はもう何も感じなかった。いつしか殴られることにも慣れてきたようにも思える。痛みは感じるし、それが快感だと思ったことなど一度もない。むしろ不快だったけど、その一時の不快を我慢するだけでよかったのだから私は私の知っている仲間達よりは恵まれているのだなと思った。

彼は私を手元に置いて自由にするだけで満足だったらしく私をひどく陵辱したりすることはなかった。

今思えば彼にはそれだけの甲斐性（いまいち意味はよく分らないが）がなかったのかもしれない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

といって差し出された手。

私はそれにすがってしまった。なぜ？

なぜ、私はそれにすがってしまったのだろうか？もう、私はすべてを受け入れられるはず。どんなにひどいことをされても一時の苦痛さえ逃れれば後はそれでもよかったはずなのに。

『大丈夫だつてこと。君を縛り付けるものはもうない．．．君は自由つてことさ。』

私は．．．自由？自由．．．自由．．．。

突然現われて私を救つてくれた。

彼は．．．。

「．．．．．！？」

暗い路地に突然明光が差し込んでくる。シトは思わず目を手で遮つた。

「あれ？先についちゃったか．．．。目測を誤ったかな？」

まるで太陽を背に背負っているように彼はそこに立っていた。

「．．．．．！」

ロザリオ！

シトは目を見開く。

「大丈夫だったか？」

その言葉はとても優しく穏やかで。

「あ．．．ああ．．．ろ．．．ロザリオ．．．。」

シトはいつの間にか頬を涙で濡らしていた。

「???い、今．．．なんて？」

ロザリオは驚愕の瞳を向ける。

「ろ．．．ロザリオ！」

それは何年かぶりに聞いた自分の声だった。そして、ロザリオにとっては初めて聞いた声．．．。

「シトが．．．しゃべった？」

「わ．．．私．．．しゃべ．．．れる．．．。しゃべれるよ！」

涙が止まらない。

「よかった。でも・・・なんで？なんでいきなり？」

「分らない・・・けど・・・ロザリオと会ったときのことを・・・
かんが・・・えてたら・・・急に・・・。」

ロザリオは思わずシトを抱きしめていた。

「よかった。これからは・・・いっぱい話そうね。いろいろ話を
しようよ。」

シトはしきりに頷いて彼の肩口に顔をなすりつけていた。

「しゃべれなかった女が喋れるようになったんでやすか？」

薄暗い店内。月も沈み込んでしまった、ミッドナイトに染まる店
内に声が響く。

「まあ、そういうことだな。」

グラスの露を払いながら男は呟いた。

「ですけどね。そんなこと、ありえるんですかい？」

マスターは半信半疑だった。

「そりゃ、俺も驚いたさ。だが、あいつは確かに喋れるようになった
んだ。きれいな声でさ。」

「はあ・・・不思議なこともあったもんでやすね。」

そんな彼のグラスをナプキンでぬぐって返したマスターはため息
をつくように座り込んだ。

「まあ。結局あいつがシトの心を解きはなつたんだろうが・・・。
俺は学者でも何でもねえから詳しいことは分らん。」

男は口を含む程度に酒を飲む。

「それで・・・そのあとはどうなったんで？」

「んー。そうだな・・・。まあ、俺たちの最悪な旅はようやく
始まったってところかな。」

(7)

「相変わらず、古くさい銃を使ってんな。」

武器屋の店主はテイオの持つ二丁の銃を眺めながら呟いた。

テイオの持つ銃、一つは口径9mmの銃、ブルーエトランゼmg 98と12,5mmの大口径拳銃のラストジェノサイ12,5スペシャルだ。どちらもかなりの旧式の拳銃だ。

「古くさくても、これが俺の相棒なんでね。」

「そりゃ、いえねえことはねえが。」

店主は肩をすくするようにため息をつく。

「いつそのこと、こいつをうつばらって新しい銃を買ったらどうなんだ？ こんだけ旧式だとそれなりにいい値段を付ける奴だっているだろうに。」

「俺にとつて、こいつはいくら積まれても手放す気にはなれねえなあんだだつてそうだろう？ 長年使い慣れてきた工具を高値で売ってくれって言われて手放したりするか？」

店主はまたため息をつく。

「そりゃそうだがな……。だけど、銃つてのは手前の命を預かるもんだからよ。新しい銃の方が信頼も増すつもんだろうが。」

「だからあんたみたいな優秀なガンズミスがいるんだろうが。」

テイオは負けじと肩をすくめる。

「まあ、そういわれれば悪い気はしねえがよ。」

店内には新型から旧式までありとあらゆるタイプの銃が置かれている。それこそハンドガンからライフル、ショットガン、マシンガン、アサルトライフル、サブマシンガン、グレネードランチャー……。数え上げたらきりが無い。

「で？ いつものでいいんだな？」

足下の棚をあさっていた店主が声を上げる。

「ああ。いつもの9mmを8ダースと12,5mmを2ダースだな。」

「 テイオはカウンターにおいてあった自分の銃を取り上げると脇と腰にしまった。」

「 12、5mmだつて……。ああ、50口径の奴か。なんだ？ 今回は使う機会があるつてのか？ あんなもん、一つ目鬼を撃ち殺すときぐらいにしかつかわねえだろうに。」

「 今回はそれ並みの奴が出そうなんだよ。旧時代の自動警備システムつて言う一つ目鬼がな。」

「 何？！……いつてえ！」

思わず頭を上げてしまった店主の脳天に堅いカウンターの木板が襲いかかった。

「 くおお……。 」

「 なにやってんだか。」

しばらくもだえ苦しんでいた彼を見てテイオは冷めた視線を送つてやった。これも彼なりの愛情表現の方法……。であるはずがない。

「 変な文章をつかうな！」

店主は叫びながら起きあがった。

「 なんだ？……変な文章？」

「 こつちのことだ……。けどよ。旧世代の自動警備システムつてそんなやばいもんとやりあうたあ……。おまえ、頭でもやつちまったか？」

「 親父……。それは失礼つてもんだ。」

テイオは店主の頭を軽くこついだ。

「 いて！ 今打ったところなんだぞ……。ここ……。 」

「 知らん。」

「 ……つたくよう……。それにしてもそんなもんがあるつていったらどこなんだ？」

「 この街の近くだ。知らないのか？」

それを聞いた店主は顔を青く染めた。

「 ま、まさか。シルバースターの炭坑……。じゃあねえよな？」

「ご名答。さすがにこの街に住んではあるな。」

「バカ！」

店主はあまりにも気楽にいいのけるティオを諷めた。

「いつとくが、あそこは人の行くところじゃねえ。あそこには悪魔が住みついてんだ。あそこには行かない方が身のためだぜ。今なら遅くねえ。いくらお前でもあそこだけはやめときな。」

「・・・ずいぶん臆病なんだな？」

「そんな問題じゃねえ！俺は忠告してるんだぜ？年上の奴の言うことはきいとくもんだ。」

「聞くわけにはいかねえな。」

しかし、ティオはそういいきった。

「なに？」

「俺が今ここでひいたら次からはずっと逃げ続けることになる。それは、嫌だ。そんなことになるぐらいなら。ここで死んだ方が1千万倍もましだぜ。」

「そいつは、ちと大げさじゃねえか？」

「いいんだよ。」

店主は大げさに肩をすくめると注文されていた。9mmの弾丸8ダースと12.5mmの弾丸2ダースを取り出すとカウンターにおいた。

「いつも通り。12レガートもらうぜ。」

「相変わらず高けえな。もうすこし負けてくれねえのかよ？」

渋々ティオは細部を探り、10レガート札1枚に1レガート札2枚をつけてカウンターに投げ捨てた。

「うちは商売人じゃねえ。技術屋だっていつもいつてんだろうが。そういうと店主は懐から煙草を取り出し口にくわえた。

「そういえば。」

「あん？」

「このあたりで徒党を組んでる輩つつたらなにを思いつく？」

ついでだから店にはいるまでティオを監視していた集団のことを

聞いてみることにした。

「なんだ？おめえ追われてるのかよ。」

「こっちは身に覚えがねえんだけどもよ。あたりをうろつかれるのはうざったい。ただそれだけだ。」

「ふん。まあ、ここいらで一番大きな奴らはレイクナットって奴らだ。」

「レイクナット？」

「自称はマフィアって言うてるけどな。一般的にはレイクナット。バカ野郎どもって意味だ。」

店主は息を潜めてにやりと笑った。

「ふーん。で？そのバカ野郎どもはなんのために俺たちを？」

「さあな。街に入った連中は全員一度はあいつらの監視下に置かれるってらしいが。こっちが手をださねえかぎり何もしてきやしねえよ。」

「もし、手を出したら？」

「地の果てでも追いかけてくるわな。あいつらのちんぴらどもはまったく問題にならねえが。私刑役って奴がいてな。そいつらは少しやつかいだ。まあ、お前に比べれば糞ほどにもねえが。ただ・・・。」

「ん？なんかあるのか？」

「その幹部クラスとなると・・・やつかいだぜ。たぶん。お前でもやべえんじゃないか？」

「ティオは”ほお・・・”と、歓声を上げた。

「それは・・・少し楽しみのような気もする・・・。」

「バカ野郎が。」

「へへへ・・・。冗談だよ。触らぬ神に祟りなしってな。いらんやつかいごとはごめんだぜ。」

「もう手遅れかもよ？」

店主はいやみったらしい笑みを浮かべた。

「あんたのその顔、俺は大嫌いだぜ。」

「相変わらず口のへらねえ野郎だぜ。」

「ふん。それじゃ。そろそろ俺は行くぜ。」

カウンターに乗せられた弾薬を鞆に詰め込むと彼は、それを肩にかけると親父のポケットから煙草を一本奪った。

「まあ、それは俺からの選別にしといてやる。」

「安っぽい選別だぜ。」

ティオはそういいながらもそれに火をつける。

「ほんじゃな。生きてたらまたよってやるよ。」

「その日が来ねえことを祈ってやるぜ。」

ティオは背中向きに肩をすくめると、

「せいぜいかなわないようにしてやらあ。」

「さっさと帰れ。店が汚れる。」

店主の捨てぜりふを背中に受け流しながらティオは店を出た。

「ん？なんだ？野郎どもの数が増えてやがる。まあ、ほっとけば害はねえか。」

ティオは鞆を背負い治すと細くて暗い裏路地を歩いていった。

「ああ！？あのバカ野郎どもにちよつかい出しただと？」

宿屋に着き、一息煙草をふかしていたティオが素つ頓狂な声を上げた。

「あんまりしつこかったからつい・・・。」

ロザリオのすまなさそうな声は普段なら茶化しているところだが、お前なあ。けんかつ早いっての。お前らしくもねえな。」

「ごめんって言ってるでしょう？」

「あのなら・・・。謝って済むぐらいならこの世に私刑なんてもんはねえんだよ。」

ちなみにこの世界に警察なんて便利なものはない。一応補足まで誰に補足してんのさ・・・。」

「なんだって？」

「べつに・・・。だけど・・・ただのちんぴらだったよ？それがいいのバカ野郎どもだっていう保証はないと思うんだけど。」

「用心してしすぎはねえよ。」

「うわ・・・。君に似合わない言葉・・・。」

「うるせえって。」

ドアの開く音が室内に響く。

二人は跳ね上がるように椅子を蹴り飛ばし、懷に手をやるが・・・。

「・・・。」

そこに立っていたのはシトだった。

「なんだ。お前か。おどかせんな。」

ふう・・・とため息をつき椅子を直すティオ。

「ご・・・めんな・・・さい・・・。」

その手がピタリともの見事に止まった。

「・・・シト？」

ロザリオの口端が見事につり上がっていく。

「・・・・・・？な・・に？」

シトは小首をかしげている。その仕草はいつもと変わらない。しかし・・・・。

「お前！言葉！話せる！」

「君のほうが言葉になつてないじゃないか。」

ロザリオはティオの肩をぽんぽんと叩いた

「そういつつこみはいらねえ。いつからだよ。」

「つい・・さつき・・。」

「そうか・・。ふーん。」

「・・・・・・？な・・に？」

シトはまた小首をかしげた。その仕草が妙におかしい。

「いやあ・・お前つて結構きれいな声してんだなつてな。」

「そう・・。かな？」

「ああ。」

彼らしくない言葉にロザリオも小首をかしげる。

「あの・・・・。」

「ん？なんだ？」

シトは何か言にくそうにティオを見ていた。言葉を話せるようになったとはいえまだまだ、自己主張ができるほどではないということだ。

「えつと・・。その・・。私の・・。せい・・。だから。」

「なにが？」

「あの・・。ロ、ロザリオ・・。が・・。喧嘩・・。した・・。の。私の・・。せいだから・・。」

「????どうということだ？」

今度はティオが小首をかしげる番だった。

「シト。それはもうい言つていったらう？」

「でも・・。」

ロザリオの諫めにもシトは納得できない様子だった。

「・・・つまり、ロザリオはシトを助けるためにやむなく喧嘩をしたってことか？」

「・・・うん・・・。」

シトは頷くが、ロザリオは首を振って、

「そうじゃない。シトはなんの関係もない。あいつらにちょっかい出したのは僕なんだし。」

「あーはいはい。分った分った。もう、その話は終わりだ。」

「「え？」」

ロザリオとシトの高い声が重なった。

「結果的にあいつらとにらみ合うことになった。そういうことではないな？」

「えっと。それで・・・いいの？」

ロザリオはティオの瞳をのぞき込んだ。

「ああ。ここはお前とシトの愛に免じてってことで。」

「ちよつとまつてよ。愛ってなんなのさ？僕は・・・別に・・・。」

「・・・？ロザ・・・リオ？どう・・・した・・・の？」

一気にしどろもどろになったロザリオを見てシトはやはりというか困惑していた。

「はははは・・・。まあ、がんばれや。別に応援なんてしねえけどな。」

ティオはそれを見てすっかりと上機嫌になってしまった。

「まったく。ティオったら、もうつきあつてられないよ。」

ロザリオはティオから思いつき視線をはずした。

「ふふ・・・。さて・・・。」

ティオはいきなり真顔になる。

「？」

その雰囲気を感じ、ロザリオも真剣な眼差しでティオに向き直った。

「今回の仕事のことだ。それと、あいつらのこと。この二つをどうするか。すこし、そこら辺を話し合おうぜ。」

それは、ティオが仕事の解きにみせる顔だった。

「そうだね。とにかくやっかいなことが一つ増えてしまったわけだ。」

それは、ロザリオも同じこと。

「・・・ティオ・・・ロザリオ・・・？」

シトは急に居心地が悪くなった。

「ああ。お前は部屋に戻っててもいいぜ。これからはなす事は聞いてても気持ちのいいことじゃねえからな。」

「うん。先にシャワーでも浴びておいでよ。その間には話は終わるだろうからさ。」

ロザリオはふとみせた。柔らかな笑み。

「・・・うん・・・分った。」

シトは安心を覚えた。

「そうそう。気持ちのいいことはその後ベッドでたっぷりと・・・。」

「ティオ!!!」

シトは聞かなかったふりをすると部屋から出て行った。

「まったく君は・・・。」

「愛嬌だよ、愛嬌。」

「もっいいよ。」

ロザリオは一度大きなため息をつくとまた表情を戻した。

「それにしても君・・・気がついてる？」

「ああ。かなりの数だな。こっちを見ている。」

「やはり・・・。」

「ああ。バカ野郎どもの私刑役って野郎達だろうよ。」

「やっかいだね。これほどまでの数を集めてくるとなると・・・。」

「こっちが銃を持つてるからじゃねえの？」

「確かに、僕らが銃を使ったらこの数でも大したことはないけど・・・。」

二人はふと、息を潜めた。急に奴らの動きが変わった。

「……！しまった！」

絹を引き裂くような鋭い声。

「ちい……俺らもまだまだ甘い！」

二人は脇目を気にせず、部屋から飛び出しシャワールームへと急ぐ。

中に人がいるかどうか確認せずに二人はシャワールームに飛び込んだ。

「クソ！やっぱりか。」

そこはもぬけの殻だった。そして、その脱衣所にはさつき脱いだばかりのシートの衣服が散乱していた。

「なんて……なんてことに……。シト……。」

「???おい。手紙があるぜ。」

何か手がかりがないものかと部屋を探索していたティオが書き置きのようなものが壁にぶら下がっていることに気がついた。

「！！なんて書いてあるの!？」

「まあ、落ち着け。」

今にも飛びかからんばかりのロザリオを制し、彼は手紙の文字を読もうとして……やめた。

「ティオ！」

「俺は字が読めなかった。お前が読め。」

「え？ああ。そうだったね。じゃあ。僕が……。」

ロザリオは冷静になるべく一度深呼吸をするとその紙に目を落とした。

「……ふざけてるよ。」

「なんだって？」

ロザリオの漏らした声にティオは聞き耳を立てた。

「明日の早朝。例の噴水の広場まで来い。さもないと女の命はないと思え。」

そして、ロザリオは最後にバカ野郎どもの自称名であるマフィアの名を読み上げた。

「バカ野郎どもが！」

「なんてベタベタなやり方なんだろう？」

「そんなやり方に引つかかる俺たちも俺たちだがな。」

「だけど。僕たちに気配を察知されなかったって言うことは、シトをさらったのはかなりの手練れってことになるよね。」

「むしろ、そのためにあれだけの人数で俺たちを監視してたんだろうよ。監視するのに案だけの人数と殺気はいらねえ。」

「なるほどね。もう、あいつらはいないみたいだ。」

「いたら、シトの居場所をはかせてやるところだったか・・・命拾いしたな。」

しばらくの沈黙。シャワールームには水の滴る音のみが響いていた。

「どうする？」

ロザリオは答えの分かり切った質問をした。いや、それは質問ではない。確認だった。

「とうぜん。シトを奪い返す。そして、奴らを・・・。」

「皆殺し・・・だね？」

「当然だ。」

「よし、やろつ。」

そういうとロザリオは近くにおいてあった鞆の中をあさり始めた。というわけだ。覚悟しておいてよね。」

そこから取り出されたのは小さな機械・・・盗聴器・・・というものだった。

「・・・。」

ロザリオは立ち上がりそれを床に放り投げると懐の銃でそれを粉々に粉碎した。

銃声がしても人がとんでくることはない。ここはそんな世界だ。

「宣戦布告は完了か？」

「うん。ぬかりなく。」

「一発無駄にしたな。」

「別に・・・一発ぐらい。」

ティオとロザリオはしばらくお互いの腹を探るように見つめ合った。

いや、それは一種の二人の遊びだったのかもしれない。

「さてと・・・とりあえず部屋の盗聴器を全部見つけて作戦会議と行こうじゃないか。」

部屋にも盗聴器が仕掛けてあることなど先刻承知だった。

「そうだね。あいつら・・・絶対に許さない・・・皆殺しだね。」

ある意味罠にはまったのは彼らだったのかもしれない。

この二人に殺意の二つ文字を抱かせたこと。それははじめから死を意味すると言うことにまだ彼らは気づいていなかった。

その盗聴器の向こうでこの声を聞いたものは、それから一晩中朝が来るまでその声が耳に張り付いてとれなかったという。

真の恐怖はかくして訪れることとなる。

グラスがかちかちと揺れる音が店内に響いていた。

「親父・・・震えているのか？」

男は自分のグラスを弄びながら聞いた。

「あ・・・いや・・・その・・・。ダンナが殺意を抱いたときのことを想像しちまいやして。」

「あのころは若かったからな。まあ、見境がなかったって奴だ。俺も、あいつも。」

グラスの中の氷は光をいい加減な方向にねじ曲げる。

「それにしても・・・ダンナを本気にさせるなんて・・・。あいつらも災難でしたね・・・。結局なんだったんですか？その、マフィアって野郎ども。」

マスターは震える手を押さえながらも聞いた。

「そうだな・・・。どこにも行く当てがなくて。何もすることがで

きない。そんな奴らがなにか犯罪に手を染めて自分の居場所を確保する……。その吹きだまりみたいなもんだ。それが、いつからか徒党を組むようになって肥大化していった。」

「なるほど。この街にもいる奴らと結局は同じってことですな。」

「そういうことだ。」

「展開がベタすぎてあくびも出ねえぜ。」

広場についた彼らはそこにたむろっていた、者達を見て細い目を向けた。

「あん？これを見てもそういえるってのか？」

その中心にいたリーダー格のものがあごで指す。

何気なくその先を見ると、そこにはどこからかっぱらってきたのか十字架に貼り付けにされ、その周りに不清潔な男どもを従えたシトがいた。

「あれを見てもそんなことがいえるってのか？」

「なんだか・・・シトの美しさが際だっているようだね。」

ロザリオは率直な意見を述べた。

「全くだ。あれはまるで・・・女神ではないか・・・。」

ティオはため息をついた。

確かに、今のシトは状況が状況でなければため息をつかんばかりの神々しさを醸し出す美しい美女だった。

「こりゃあ・・・ロザリオに譲るにはもったいなかったか・・・。」

「だめだよ・・・シトはもう僕のものなんだからね。」

ロザリオは薄い笑いを浮かべた。

「おい！てめえら！なに勝手なことしゃべってやがる。この状況が分つてねえのか？下手なことしゃがったら。あのお姫さんのお顔に真っ赤な筋がつくことになるぜえ？」

はたしてそれは脅しだったのだろうか？いや、普通の人間にとってはそれは脅し以外の何者でもないだろう。

しかし、

「そんなことをしたら・・・お前らは皆死ぬことになるな。一瞬で。」

「僕らを脅しているつもり？それだったらもつとましな方法を考え

るべきだったね。」

「な!？」

リーダーの男はほえた。

「なあ・兄貴。やっぱりやばいって。ここは上の連中に報告してさあ……。」

彼を兄貴と称した小太りの男はそう耳打ちした。

「バカ野郎。この程度で上の連中を動かしてみる俺たちがまるっきりの無能者扱いじゃねえか!」

「だけだよ・こいつらマジやばいって。普通の奴らじゃねえよ。」

そいつは昨日まで盗聴器の内容を確認していたものだった。だから分る。彼らが普通の人間ではないということを。實際畏にかかっているのは自分たちなのではないかと気づき始めている。

「は!だからどうしたんだ?銃さえうばっちまえば……。」

「だったら。なぜ初めっからそうしなかった?」

ティオの声が広場に響く。そして、いくつかの乾いた音。

「残念。僕たちのお姫様は返してもらったよ。」

リーダーが気づいたときにはシトはすでにロザリオの手の中だった。

その隣にいたもう一人の取り巻きの男ははつきりと見ていた。

ティオの放った銃弾はまるで魔弾の後とく、シトを戒める縄のこごとくを破り去り、ロザリオの一度の跳躍でシトをかこんでいた二人の男は地面に伏した。

「やっぱり地上にいた方がシトらしくていいな。やっぱりシトは女神より人間の方がいい。」

葉莢が地面に落ちる無機質な音とともにティオの声が響いた。

「ふふ……誰でもない人間って意味だからね。シトって……。」

「

ロザリオの着地する音もそれに混じる。

「さて……。お姫様の眠っているうちに……。」

ティオはロザリオを見た。

「うん、そうだね。・・・さあ・・・」

ロザリオもニッコリと笑ってシトを抱きかかえるとあいた方の手を懐へと突っ込んだ。

「バカ野郎どもを土に返す時間だ!」

そうして、大地は赤く染まっていた。

「・・・う・・・ん？」

シトは目覚めた。

気がつくと自分はベッドに寝かされている。

「あ。おきた？」

そばに座っているのはロザリオだった。すでに日も落ちてしまったのか、部屋には夜のとばりが覆い尽くしていた。

「えつと？わたし・・・？」

起きあがろうとするシトを制してロザリオはニッコリと笑うと。

「大変だったね。シャワールームで倒れたんだよ。それからずっと眠り続けていてさ。」

「わたし・・・あれからずっと？」

「うん。だけでももう大丈夫だよ。」

シトは何か違和感を感じた。しかし、それが形になることはなくただ、もやもやとしたものが心に残るだけだった。

「・・・？ロザリオ？」

シトはロザリオを呼んだ。なぜか彼が違う世界の住民に思える。

「ん？なに？」

しかし、彼が浮かべるのはいつもの柔和な笑みだけだった。

「・・・なんでも・・・ない・・・。」

「そう？まあ、もう寝なよ。明日は山登りだし。体力つけなくちゃ。辛いよ？」

易しい声はシトに安心を運んでくる。

「うん・・・おや・・・すみ・・・な・・・さい・・・。」

シトは次第に微睡みの世界へと落ち込んでいった。

「お休み・・・シト。僕の大切なお姫様・・・。」

ロザリオはそう言い残すと静かに部屋から出て行った。
「眠ったか？」

ドアのそばに寄りかかっていたティオは相変わらずの仏頂面を浮かべていた。

「うん。いま寝たところだよ。」

「そうか。」

「ねえ？」

「なんだ？」

「これでよかったの？」

ロザリオはあえてシトに嘘をついた。それは、ティオに言われたことでもあったからだ。

「いいさ。これで。知らないってことは幸せでもあるんだ。」

「相変わらず・・・君には似合わない言葉だね。」

「どちらにせよ。柵を背負うのは俺たちだけで十分。あいつはきれいなままでいるのが一番だってことだ。」

「そうだね。何しろ・・・僕らのお姫様だもんね。」

「そういうこと・・・。だけど、お前にとっては俺らのじゃなくてお前のついていたいんだろうけどな。」

ロザリオはにこつと笑った。

「大丈夫だよ。シトは僕らのお姫様だよ。だから、守っていければいいね。うん。守っていきたいよね。」

「・・・。どうだかな・・・。もう寝るぜ。それともどこか飲みに行くか？」

「いいや、やめとく。朝が辛くなるからね。」

ロザリオは首を振った。それ以上に今、シトを一人にしておきたくはない。

「ま、そうだな。俺は少し夜風にでも当たってくらあ。」

あくび混じりに煙草を取り出すとティオは夜の廊下を歩いていった。

「うん。お休み・・・ティオ。」

「皆殺しですかい……。」

マスターは余った酒を混ぜ合わせ、即席のカクテルを作っていた。
「まあな。今になっちゃあ、さすがにやり過ぎだったとは思うがな。」

「赤茶けの大地をさらに深紅に染め上げたって訳ですかい？」

「あれは、深紅と言うよりは赤銅色といった方が適切だったかもしれないな。」

そのカクテルを不味そうに口に含みながら、まるで遠くを見つめるように彼はのどを鳴らした。

「はあ……なんだか想像しちまったら胸焼けがしそうですね。」

「想像しないことだな。」

「あいにくと想像力が豊かなんでね。」

「だったらもうやめようか？」

しかし、マスターは首を振る。

「いえいえ、ここまで聞いてしまつては引き下がることはできません。まだ夜は始まつたばかりだつてんですから。」

「物好きもいいところだな。……もう少しうまいカクテルはねえのか？」

空になつたグラスをカウンターの木板に置きながら男はまた煙草を取り出した。

「うちはカクテル専門じゃねえんで。倉の方にまだシュワルツの19があつたきがしましたが……。」

「それにしてくれ。」

「ガッテンです。今夜は付けになりそうでやすな？」

「少しはまけやがれ。」

「それは無理な注文でやす。」

そう言い残すとマスターは店の奥に引つ込んでいった。

「やれやれ……だけど……辛いのはそれからだったな。まったく。なんであんなことになつちまつたんだ？」

はき出された煙が再び過去を呼び覚ます。第二部の始まりであった

第二部（１）

夜にも勝る暗い闇が広がっていた。

シルバースター山脈にはかつて大きな炭坑があったことは街の間であれば誰でも知っていることだ。

今は既に過去の遺産となってしまうている。

かつての戦争は人々からすべてを奪い去ってしまった。すむ場所、生きる糧、そしてその命や誇りさえも。

ロシナンテが言っていたことだった。

「そういえば昔、カルボナーラっていうパスタが流行ったって知ってたか？」

そんな闇の中でふとティオはそんなことを口にした。

「は？いきなりなんだっていうんだい？」

先を歩いていたロザリオは手持ちの役に立たない地図を片手に道を探し出していた。

「カルボナーラ？」

ちょうどティオとロザリオに守られるように二人の真ん中を歩いてたシトは首だけを振り向かせた。

「そ。卵の黄身とクリームとチーズと一緒に煮立ててそこにパスタを入れて食べるってやつ。結構美味かったな。」

「・・・おいし・・・そう・・・」

「お？そうか？今度作ってやろうか？っても材料が手にはいらねえがなあ・・・」

そんな二人の会話を聞いていたロザリオはいきなり立ち止まった。「あのねえ。ティオ？今はそんな話をしているときではないでしょうが！」

ロザリオは少し起こっている様子だった。暗くてその表情を性格に伺うことはできないが。

「だけどよう。自動警備システムが稼働してるってところはまだ先

の方だろうか？それまで暇だしよう。」

ティオはあくびをした。炭鉱内で粉塵爆発が起こる可能性も否定できないためこの中で煙草を吸うことはできない。

しかも登山の荷物削減のため、せつかく買っておいた酒類も没収となった。これで敵が出てこずにただ単にしんがりを務めるティオの緊張はゆるみまくっていたのだ。

「だけど。その情報でさえも古いものなんだよ？もしもその範囲が拡大してたらどうするのさ？それにこの地図だってもう既に当てにならない。わかる？もう僕たちは未知の世界に踏み込んでいるってことなんだよ？」

ロザリオは熱く語っている。

「ああ。その通りだ。そのことは実に魅力的だな……。」

「ティオ！」

この期に及んでなおも緊張感を持つとしないティオにロザリオのいらだちは頂点に達した。

「だがな。俺だってそれなりに危機管理意識は持つてるつもりだぜ？そうして俺はこの辺り一帯はまだ安全だって考えている。それに道はお前が造ってくれているからな。だから、せめて場を取り持とうとしたわけよ。常にピリピリしてたら身がもたねえぜ？」

「それは……そうだけど……。」

そのことはロザリオもよく知っている。ティオは本当の危機が訪れたときは誰よりも早くそれを察知し、誰よりも確実にそれを処理する。

「……仲良く……しよう……よ？」

終始居心地の悪そうにしていたシトは二人をなだめるように視線を送った。

「まあ。そうだね。……ごめん……少し臆病になってたみたいだ……。」

「んー。そうだな。俺も悪かったな。確かに緊張感がたらんかった。」

こんなことで仲違いをするような二人ではなかったのだが、シトがいることにより二人の関係はさらに潤滑しているようだ。

「ところでよう．．．腹へったと思わねえ？」

ティオは話が終わったところで腹をさすっていた。

「そうか．．．もうそんな時間か？」

ティオは手持ちの時計を見た。暗闇の中でもぼんやりと光るそれは今が昼飯時だと言うことを示していた。

「そうだね．．．ご飯にしよう。」

「．．．．．」

シトはうれしそうに微笑むとリュックの中から敷物と人数分の弁当を取り出した。

朝早く起きて作っただけらしい。なんというか．．．手際がよいというか用意周到というか．．．。

「シトが作った弁当か．．．結構楽しみだな。」

ティオは既に舌なめずりをしていた。

「．．．．たぶん．．．味は大丈夫．．．だと思う。」

シトは二人に同じデザインの弁当箱を手渡すとそれより二回り小さな自分のものを取り出した。

「ふーん．．．鯨肉の揚げ物に、鳥皮の煮物。それに．．．これはパスタか？」

種類は少ないがそれなりの分量のある弁当にティオは舌鼓を打った。

「うん．．．パスタを．．．ピザみたいにしたの．．．。」

「なるほどね。」

ロザリオはピザパスタを8等分するとそのひとかけらに鯨肉の揚げ物をたっぷりのせてほおばった。

「あ、これ結構おいしい。」

味の濃い鯨肉にほとんど味のないパスタが絶妙なハーモニーを生み出している。

「よかった．．．。」

シトはうれしそうに微笑むと自分も弁当の中身をほおばり始めた。「ふーん。こんなくずみたいな材料でここまで美味くなるんだ。やっぱり料理は料理人の腕だな。」

ティオはよつほどピザパスタが気に入ったのか。脇目を振らずにむしゃむしゃと口にほおばっている。

「ティオ・・行儀が悪いよ。」

ロザリオはティオと違って僅かにそういったマナーを気にしているのか。口に付いたソースをナプキンでぬぐっていた。

「こんなところで、それに今時テーブルマナーを気にする奴なんていねえよ。」

対するティオはまるでルージュをひいたような唇になっていた。

「・・・くすくす・・・ゆつくりと・・・食べてね。」

シトはそんな二人を満足げな笑みで眺めると自分もそろそろとピザパスタをほおばっていく。

「そういえば。シトは料理できたんだねえ。どこかでそういうことやってたの?」

ロザリオは半分ほど食べ終わった弁当を見下ろしてふと気がついた。

「ロザリオ。こいつの境遇を考えてみな。そういうチャンスはいくらでもあつただろうが?」

「あ・・・そうか・・・ごめん。」

ティオの指摘にロザリオは口を噤んだ。

シトは売られてしまった人間だった。買った方の人間にとってはシトはいわば奴隷のようなもの・・・。自分の食事を作らせるなどさせて当たり前のことだった。

「・・・ううん・・・かわない・・・よ・・・それに・・・」

シトは首を横に振ると少し恥ずかしそうな眼差しで二人を見つめる。

「それに?」

ティオは言葉を促す。

「それに・・・今は・・・みんなと一緒に・・・だから・・・。」
シトの頬が夕日のように赤く染まる。

「・・・うれしいこと言ってくれるよね・・・。」

ロザリオも不意に頬が赤く染まりそうになった。

「全くだぜ。」

ティオはふと思いついた。

「なあ。この仕事が終わったら三人でブリタニアにいかねえか？」

ロザリオは「ああ、いいね」と真っ先に賛成した。

「ぶりたにあ？」

シトはまだブリタニアに言ったことがないのだろう、小首をかしげた。

「そうさ。ブリタニアって言うのはこの大陸で一番栄えた街なんだ。海に近いからいろんな物が入ってくるし、食べ物も比べ物にならないほどおいしい。」

ロザリオは熱っぽく語った。

「うみ？」

「そう。海だ。言ってみればつかい水たまりだな。本当につかい。世界のあらゆる大陸につながっている。世界一でつかい水たまりだ。」

「大きいのか？」

「そうさ。本当に大きい。その港から船が出ていてね。そこは他の大陸の首都、ジャルパニアっていう古い都に続いているんだ。その文化が一種独特でさ。」

「ふね？」

「その海に浮かんでいる乗り物だ。言ってみれば海の列車みたいなものだ。船の旅か・・・もう4年はしてないな。」

「楽しい？」

「楽しいよ。本当に・・・世界にはまだまだ僕らの知らない物がいっぱいある。見てみたいよね。」

「いつかジャルパニアにもな・・・。」

二人は夢を語り合った。シトは始終驚いたようなあこがれのような表情で耳を傾ける。

そう、このときは一番幸せだったような気がする。後から考えてみても。まだまだ夢があったから。彼らを縛り付ける物がまだ何もなかったときだったから。まだ、彼らは大空を自由に舞う鳥のような物だったから。

「さてと・・・そろそろ行くか？」

会話を中断することを名残惜しそうにティオはそういうと、空になった弁当箱をシトに預け立ち上がった。

「そうだね。これ以上こうしていると時間が過ぎていってしまってもんね。」

「残念・・・。」

三人分の弁当箱をリュックにしまい込みながらもシトはロザリオの手を借りながら立ち上がった。

(2)

ティオの表情が戦闘モードに変化していく。

ロザリオは耳を澄ませた。

痛くなるほどの静寂の中、何かが動き振動するような低い音が聞こえてくる。

「まさか……。」

「奴らの活動圏内だ……後一步……その出っ張りを越えたあたりからだな。」

ティオはいつの間にか取り出した50口径の拳銃でロザリオの足下にある岩の出っ張りを指した。

「いつの間にか……だね……。もしかし、知っててここで食事にしようって言ったんじゃないあ？」

ロザリオは驚いたようにティオを見る。

「さて。どうだろうな。」

ティオはにやりと笑うとロザリオの手から懐中電灯を奪い去り、二人の前に出た。

「見えるか？あそこのレーザーサイト。」

ティオは銃で暗闇の向こうを指した。

「……何か赤い点が見える。」

目のいいロザリオですらその識別には少しの時間がかかった。ということはそのレーザーサイトはかなり向こうにあるということだ。「電灯で少し照らしてみた限りで言うと。少しでもここから前に進むとあのサイトが反応してこの先にある備え付けの自動操縦型トーチカが火を噴くってことだ。」

「それじゃあ……。あのサイトを破壊できたら……。」

「そういうことだが……。失敗したらそれに反応してやつぱりトーチカが火を噴く。一回が限界だな。それに、逃げることもできない。」

ティオは銃のシリンダーを一度スリングアウトし中の弾薬を確認した。リボルバー方式の回転型のシリンダーを持つそれは無骨な外見を大いに露わにしていた。

「さて・・・少し離れてな・・・狙いをつける邪魔だ・・・。」

ロザリオは無言で頷きシトをつれて5メートルほど後ろに下がった。

「一か八か・・・まあこの距離なら大丈夫だろう。」

いざ銃を構えようとしたところ、ティオは誰かが自分の袖を引っ張っていることに気がついた。

振り向くとそれはシトだった。

「なんだ？」

「・・・がんばって・・・。」

頬を染めながらも必死でそういう彼女を見て、ティオは微笑んだ。

「大丈夫だ。一発で決めてやるよ。」

「うん・・・信じてる。」

そう、一言だけ告げるとシトはロザリオの待つ場所へと引っ込んでいった。

「さてと・・・責任重大だな。」

ティオは一度だけ深呼吸をするとゆつくりと銃を前につきだした。ジェノサイドフアングと名付けられた50口径、およそ12,5mmの弾丸を撃ち出すその銃はおよそ人の扱える物ではない。その威力、飛距離、破壊力は現在この世界に存在するどの拳銃よりも群を抜いているのだ。

そして、その反応はものすごい。この銃を扱う者に求められることはひとえに屈強な体躯のみ。

「・・・！！」

ティオは一瞬息を止め、そして一気にトリガーにかけられた指を引き絞った。

耳をつんざくほどの轟音の鳴り響く中。それに混じって僅かなガラスの割れる音が響いた。

「・・・成功だ・・・」

ティオはやれやれと汗をぬぐった。この炭坑はひんやりとして冷たい空気が漂っている。その中でいても汗を流すくらい彼は緊張していたのだ。

「おめでとう！ティオ！」

今にもブラボーと叫びださんほどの勢いでロザリオは手を叩いた。
「・・・よかった・・・」

シトはとりあえず皆生きていることを思い安心を覚えた。

「結構ぎりぎりだったな。後1mmずれてたらやばかった。」

「これでトーチカの心配はなくなったね。」

「まあ、とりあえずはな。」

「先に・・・進む？」

シトの言葉に二人は力強く頷いた。

「ここからは俺が先頭になった方がいいだろう。地図は・・・いらねえか・・・役にたちゃしねえ・・・」

「ライトは・・・私が・・・持つ・・・よ。」

シトはティオから預かったライトを大事そうに抱えていた。

「分った。それじゃあ、俺の足下から少し前あたりを照らしてくれるか？」

「うん・・・分った・・・。」

シトは頷いた。

「じゃあ。僕はしんがりと言うことで。」

「頼りないしんがりだが・・・よろしく頼むぜ。」

「頼りないはよけいだよ。」

暗い闇の中その先に待つのは血に飢えた機械達。それでも彼らの周りだけはまるで光がもったかのようにだった。

「さてと・・・ギャラリーも集まってきたことだし・・・さっさと切り抜けるぞ！」

「イエッサー！」

ティオは駆け出し、ロザリオはシトを抱きかかえるとそのままテ

イオの後に続いた。

「・・・・・・???」

シトは何がなんだか分らなかった。しかし、流れていく周りの景色をよくよく眺めてみるとそこはただっ広いフロアになっているようにうで・・・その壁にはいくらかの赤いランプがともっていた。

「・・・・・・！」

いや、それはランプではない。しかも、それは壁ですらない。それは、機械的な腕を今にも自分たちに向かって振りおろさんとしていた機械人形だった。

「シト！頭。」

一瞬茫然としていた頭がその声で一気に現実には引き戻される。シトは半ば本能のままに頭を抱え込んだ。

一瞬の後自分のそばを鋭い何かが駆けてゆく。

それが、機械人形のマニピュレーターであることは後から分ったことだった。

「ちつくしう。思ったより数が多い。」

ティオはジェノサイドファンングを右手に持ち左手には9mmのエトランゼと名付けられた銃を握り、絶え間なくそれを放っていた。ロザリオはシトを抱えているため銃を取り出すことができない。

「ティオ。僕が先に行くから後方の援護をしてくれ。」

ロザリオは敵の一瞬の攻撃の隙を見て、一気に跳躍し、ティオの前に出た。

「了解！抜かるなよ！」

火薬の炸裂の光で一瞬だけフロア全体が明るく照らされる。そこには10を超える機械人形がひしめいていた。

「手榴弾を使う。耳ふさいどけ！」

ティオの声にシトは迷わず耳を堅く塞ぐ。何か堅い者が床に落ちる音・・・。

「5, 4, 3, 2, 1, ...。」

耳元でささやかれるロザリオのカウントダウン。その次の瞬間、

耳がわれてしまうほどの轟音があたりに響き渡る。

「ひ・・・！」

シトは思わずうめき声を上げるが、ロザリオがそれを気にすることとはなかった。

「テイオ。手榴弾はそれで最後だ。これ以上使つと炭坑自体がやばい！」

今の爆発の衝撃波は炭坑自体を揺るがせたような気がした。ロザリオは若干の予感から忠告を促した。

「分つてる。それは俺も感じた。」

マガジンチェンジの音が響く。

「こんなことなら、12,5をもつと買つとくんだったぜ！」

見ると機械人形のほとんど大半は既に動かないくず鉄になっているようだ。殺気の手榴弾が効いたのだろうか？ いや、今はそんなことを考えているときではない。

ロザリオはフロアの終わりの急に狭くなっている通路に突進するかのように滑り込んだ。

(3)

一瞬の後、それに折り重なるようにティオも滑り込んできた。

「セーフだな。あいつらの活動範囲はこのフロアだけだったみたいだ。」

「いい加減どいてよ・・・重いんだから・・・。」

ティオはロザリオが自分の下敷きになっていることに初めて気がついた。

「おっと。わりい。」

ティオはいそいそとロザリオの上から降りた。

「あ・・・これは・・・。」

ようやく視界が開けたロザリオの目に飛び込んできたのはレーサーサイトを使い物にならなくされたトーチカだった。

「ふん・・・。こうなってしまうえば単なるがらくただな。」

ティオはそれを乱暴にけりつけた。

「やめなよ。動いたらどうするんだ？」

「大丈夫だって。」

確かにティオの言うとおり、そのトーチカが動くことはなかった。「せつかくだ。ここの弾薬をもらっていこうぜ。何か、役に立つものがあるはずだ。」

ティオはそういうとトーチカを開き、中をあさり始めた。

「どう？何かありそう？」

破片で腕をけがしたシトの手当をしながらロザリオはとにおりトーチカの中をのぞき込んだりしていた。

「ん・・・お、グレネードランチャーがあるぜ。それに・・・おお！これはC4（プラスチック爆弾）じゃねえか！」

がさごそという音の合間にそんな歓声が上がる。

「へーC4であるの。なかなか大漁じゃないか。」

「C4って・・・何？」

そういつた武器類のことに疎いシトは彼らの会話の内容がさっぱり分らない。

「ん・・・別に覚えなくてもいいんだけどね・・・。プラスチック製の爆弾で少ない量でかなりの爆発力を発揮するんだ。さっきの手榴弾はどつちかという金属の破片で傷つくタイプだけどC4は純粹に爆発力だけで敵を吹っ飛ばすものなんだ・・・ってわかる？」

「シトは首を横にふる。」

「・・・ごめんなさい・・・全然・・・わかんない。」

「いや・・・わかんなくてもいいんだけどね・・・。」

お姫様にこんなこと教えてもいいんだろうか？と思いつつも彼は手当を続けた。手榴弾の余波は結構なものだったらしい。

「なんだ？ロザリオ。こいつにいらんこと吹き込むじゃねえぞ。」

「分ってるよ。」

あらかた調べ終わったティオは結構重装備に見えた。

「何か・・・持とうか？」

シトは本当におずおずと効いた。

「いや、いい。っていつでもお前じゃもてねえだろうか？」

確かに、彼の持つものはどれもこれもかなりの重量がありそうだった。

「うん・・・ごめん。」

「だから・・・謝ることじゃねえって。」

ティオは俯いてしまったシトの頭をわしわしとなでつけた。

「・・・。。。」

シトは心なしかその手を気持ちよさそうに受け入れていた。

「さてと・・・もうめばしいものはなかったの？」

ロザリオはメディカルセットをバックの中にしまい込むと立ち上がった。

「ああ。まあこんなもんだ。さすがに、あの砲塔を持ってくわけにもいかなえだろう？」

ティオは親指でトーチカを指した。そのトーチカのメインとなるキヤノンは戦車のそれとほとんど変わらない規模をほこっていた。

「まあ、言われなくとも。」

ロザリオはあっさりと不採用の烙印をはった。

「だろっ？」

「ということは・・・。」

「とつとと最深部に向けてレッツゴーだ。」

変に陽気なティオの口調が気になるところだが、あえて放っておこう。とロザリオは結論を下した。

「・・・わたし・・・。」

シトはそんな二人の後ろでたたずんでいた。

「ん？どうしたさっさとこねえとおいてっちまうぞ？」

先頭切ったティオはそういうがシトは動きそうにもない。

「どうしたの？まだどこが悪い？」

しかし、シトは強く頭を振るだけ。

「・・・ちがうの・・・わたしたけ・・・やくたたず・・・わたし・

・あしでまとい・・・だから・・・。」

「ああ、そういうことか。」

ティオは何となく納得したように頷くとシトのそばにやってきた。

「だったらこれを持っててくれ。」

ティオは懷からハンドガン、エトランゼを取り出しシトに手渡した。

「え？でも・・・わたし・・・つかえない・・・。」

シトはそれを手にして困惑したように視線を泳がしている。

「俺はこれからこいつらを使わないといけない。」

ティオはさつきトーチカから強奪した武器類を指した。

「だから、今はその銃は邪魔なんだ。だからお前が持っていてくれな
いか？大切にしてくれよ。そいつはこいつよりも古い相棒なんだか
らな。」

「まあ、そのことに関しては否定しないよ。」

ロザリオはなにやら複雑な表情を浮かべていた。

「でも……。」

「それに、ライトを持った人間が来ないと先に進めないじゃねえか？」

「あ……。」

シトは自分がライトを抱えていることをようやく思い出した。

「うん……わかった……わたし、さををてらす……。そうしたい……。」

シトはエトランゼを大事そうに抱えたとリュックのポシェットに大事そうにしまい込んだ。

「そう。それでいい。そこならなくさないだろう。」

ティオはニカツと笑うと先に歩き出した。

「実はね……ティオはその銃を絶対他人に預けたりしないんだ。」

ロザリオはそうシトに耳打ちする。

「そう……なの？」

シトは驚いた表情を浮かべた。

「うん。だから。シトはティオに信頼されているよ……たぶん……僕以上にね。」

「そんなこと……ない……ティオは……ロザリオを……いちばん……しんらいしてる。と……おもう……。」

「おーい。二人ともなにしてんだ。しんがりが後ろを警戒しないでどうするんだ？ライトがないと前に進めないだろうが？」

少し先でティオが待っている。

「すぐ行く。」

ロザリオはそうティオに告げるとシトの手を取り彼のもとに駆け寄っていった。

(4)

「そういえば、この奥にはいったい何があるか知ってるの？」

ロザリオはすっかりと静かになった空洞の壁に手を伝えその感触を確かめていた。

「なにつて？」

ティオはシトの照らすライトの光を頼りにズンズンと先に進んでいつている。

「いや・・・確かにこの先にフレアストーンがあるってことは知ってるって言うか、聞いたけど。正確にどこにあるかなんて聞いてないじゃないか。」

「ふーん。それもそうだな。」

ティオが急に立ち止まるものだから、シトはその広い背中にぶつかってしまった。

「・・・・・・・・。」

シトは額をさすりながらライトを持ち直した。

「だろ？」

「だがな・・・まあ、先に進んだら分るだろう。フレアストーンなんて目立つもんが分らねえはずがねえからな。」

「・・・・まあ、君らしいといえば君らしいね。」

ロザリオはやれやれとため息をつくと思いついたように懐を探ると愛用の銃、フォールンヴェスパを取り出し、マガジンに弾が装弾されていることを確認するとスライドをひいた。

ガチャリという音が暗い闇の中に響き渡る。

「相変わらずいい音だぜ。」

ティオはそういうと止めていた足を元に戻した。再び炭坑に三人分の足音が響く。

「だが・・・この警備システムはあまり機能していないのかな？」
ロザリオは不思議そうにあたりを見回している。

「いや・・・さつきから嫌な視線を感じやがる。警備システムが動いてねえにしてもなにかろくでもねえもんが動き回ってやがるかんだ。」

「・・・一つ目鬼サイクロプスでもいるのかな？」

ロザリオはろくでもない冗談を口にする。

「そんなもんですめばいいんだがな・・・。」

ティオの憎々しげな言葉にシトは小首をかしげた。

「さいくろ・・・ぷす？」

「ファンタジー小説に出てくる一つ目の鬼だよ。現実にはいない・・・。」

そんなシトにロザリオはそつと耳打ちした。

「?????そう・・・なの？」

「そうだ。」

そんな二人の会話を聞いていたのか、それに答えたのはティオだった。

「どうやら・・・追っ手がいるみたいだね。」

「だろうな・・・。」

ようやくまともな答えが返ってきてティオは少し安心を覚えた。

「どうする？」

「別に・・・そいつが仕掛けてれば返り討ちにしてやる・・・そんな程度で十分だろ。」

「だよね。」

二人は話しながらも歩調をゆるめることはない。さつきからずつと道は一本道になっているため考えなくても歩くことはできるのだ。「ところでティオ・・・ magari 道でちゃんとマーキングはしているだろうね？」

一応のマッピングをしているロザリオはティオに確認した。

「まあな。一応のことはしているよ。出るとき分らなくなるからな。」

「そう・・・。」

ロザリオはとりあえず安心した。

「・・・・・・。」

ティオはゆつくりと歩調をゆるめた。

「・・・・・・？」

シトはそれにあわせて自分の歩調もゆるめていく。

「・・・・やつかいだな。」

ティオは頭をかきながら立ち止まった。

「どうしたの？」

ロザリオは彼の先にある闇に目を向ける。

「ちよつと見てな。」

ティオはそういうと足下にあつた手頃なサイズの石を拾い上げると前に向かって放り投げた。

乾いた音が炭坑に響き渡る。

「・・・・自動発射装置か・・・・。」

ロザリオはうなつた。

暗い闇の中にはさつき投げられた石が粉々に砕け散っている。

「やつかいだろ？」

「確かに・・・・フィールド内の動くものはすべて自動的にねらい撃ちにするシステムなんて・・・・聞いたことはあつても見るのは初めてだね。」

ロザリオは腕を組むと洞窟の壁に背を預けた。

「チャフがあれば万事解決だな。」

ティオはシトの持つライトの明かりを手がかりに荷物をあさり始めた。

「チャフか・・・・そういうえば買つてなかったな・・・・スタングレネードだつたら2つほどあるんだけど。」

ちなみにチャフとは金属片をあたりに散布させることにより一時的に電子機器を狂わせるもの。監視カメラなどをごまかすのによく使われるものだ。

「こういう事態になることは予想できていたはずなのにな。うかつ

だった。」

ロザリオは自分のうかつさに頭を抱え込む思いだった。

「まあ、そういつてではじまらんだろ。だったらやることは一つだな。」

ティオはそういうと立ち上がった。どうやら先ほどトーチカから略奪してきた荷物の中にもそれらしきものは見あたらなかったらしい。

「どうするの？」

ロザリオは彼の言いそうなことを予想しながらもそう聞いた。

「装置が反応できないぐらいの早さで駆け抜けるのさ。単純だろう？」

ティオはいたずらっぽい笑みを二人に投げかけた。

「やれやれ・・・君らしいっていえば君らしいんだけど。」

シトは訳が分らない表情をしている。

「もったいないが・・・走るには邪魔なものは置いていこう。」

ティオはそういうと、今まで身体につり下げていた荷物を下ろし始めた。そのほとんどはトーチカから略奪してきたものばかりだ。

「もったいないけど・・・まあ、仕方ないか。」

ロザリオはショルダーパックをおろすとスタングレネードを初め雑多なものを地面に置いた。

「帰るときにとっていけばいいもんね。」

ロザリオはそういうとそれらを一つのまとめ洞窟の隅に固めた。

「そういうこった。」

ティオはシトを見た。シトはようやく事態を把握できたようで少しおどおどした様子だった。

「・・・どうした？」

「わたし・・・そんなにはやく、はしれない・・・。」

シトのいったことはティオも予想していた。

「分ってるよ・・・だから・・・。ロザリオ、準備はいいか？」

「OKだよ。」

ロザリオはニツコリと笑うとシトの手をつかんで引き寄せた。

「・・・なにを・・・するの？」

ロザリオの手のぬくもりを感じながらシトは困惑した表情をティオに向けた。

「僕が君を抱いていけばいいんだよ。」

といいながらロザリオはシトを腕の中に抱きかかえた。

「お姫様だっこってやつだ。今はうらやましいと言っておいてやるぜ。」

ティオはそういうといつの間にか取り出していた自分の銃の弾倉を確認した。6発のチェンバー内にはしっかりと弾がつまっている。

「・・・行くぞ・・・。」

ロザリオとティオは呼吸を合わせるように頷き合つと正面、一様に広がる闇の中をにらみつけた。

シトにもその緊張が伝わる。張りつめた緊張の中次第に身体は冷たく冷えていく、しかしなぜか額からは汗がにじみ出てきていた。

「・・・。。。」

シトはロザリオの邪魔にならないようにその汗をぬぐう。

「しっかりと掴まっていけないといけないよ。」

そんなシトに対するロザリオの言葉にはいつもの柔らかさがなかった。

「・・・うん・・・。」

シトはロザリオの顔を見上げながら彼の背中に手を回し、自分の身体をしっかりと押し当てた。

シトの身体を通してロザリオの鼓動が聞こえてくる。

「・・・あたたかい・・・。」

その鼓動はとても緩やかだった。そして、そのぬくもりはやがてシトに安らぎと安心を与えてくれる。

「・・・。。！」

ティオは突如走り出した。ロザリオもそれを追うように駆け出す。
「・・・。。！」

シトは一瞬何が起こったのか分らずただ目を閉じただけだった。暗い闇の中、二人が目指すのはただ一点、僅かに漏れ出す光。その淡い光点のみだった。

再び乾いた音が闇の中に響いた。

ロザリオの背後で何かがはねる音がシトの耳を刺激する。

「……あとすこしだよ……。」

ロザリオの柔らかな声がかすかにシトの耳に届いた。

「……？ロザリオ？」

シトは閉じていた目を僅かに開いて彼の表情を伺う。しかし、ここにあったのは目を閉じる前とおなじ顔だった。

空耳？とシトは一瞬思う、

「……もう少しの辛抱だから……。」

今度は空耳ではなかった。

「……うん……。」

シトは腕に力を込めた。ロザリオの鼓動がさらにはっきりと聞こえてくる。

「……いきてる……わたし……まだ……いきてる……。」

「もうすぐ出口だ。二人とも付いてきてんな？」

ティオの声が二人の鼓膜を震わせる。

「大丈夫、ちゃんとして行ってるよ。」

ロザリオはシトを抱え治すとさらに走る速度を上げた。

「よし。それならいい。何かあっても助けられんからな。悪いが。」

「いいよ。それはお互い様だから。」

いや、二人はお互いを信用しているからこそ、そういえるのだ。

ティオなら、ロザリオなら大丈夫。何かあっても自分の力で何とかできる。お互い固く信じているのだ。

「……自動発射装置の感度がいまいちなのが助かったね。」

「まあな。何せ旧世代のもんだからな。放置されてかなりたってや

がるから、相当ガタがきてんだろっ？」

目をこらしてみると、自動発射装置は一つではない。しかし、

その大半は地面に落ちているか行動を停止しているかのどちらかで実際に稼働しているのはその中の1、2機程度だ。

「全部動いている時のことを考えたくないね。」

ロザリオは岩がむき出しの大地を蹴りながら進む。

「蜂の巣にされちまわあ。」

二人はまるで風のようなだった。何者にも支配されない、自由の風。二人を形容するのならそんな言葉が一番似合っていた。

「・・・私もそんな二人とこれからずっと一緒にいられたら・・・。」

シトは思った。そうであつたらどんなにいいだろうと。

「・・・！！！」

突然まぶたに差し込んできた強い光。焼かれるようなまばゆさにシトは目をしかめた。

「・・・な・・・に？」

闇に慣れた目には強すぎる光だった。これは何の光なのだろうか？
「ん・・・。」

シトはゆっくりとまぶたを持ち上げた。その瞳に映るのは・・・。

「・・・ロザリオ・・・。」

その瞳には夕日に染まるロザリオの顔だった。

「・・・ゆうひ・・・？」

シトは吸い寄せられるように空を見上げた。

「・・・あ・・・。たいようが・・・でてる・・・。」

そこには真つ赤な太陽。そして、紅に輝く薄い雲だった。

そして、シトは気が付いた。自分はまだロザリオに抱きかかえられたままだったということを。

「あ・・・ロザリオ・・・。」

「うん？何？」

ロザリオは今度はしっかりとシトの顔を見た。

「・・・おろして・・・ほしいの・・・。」

シトは少し恥ずかしそうにいうとロザリオの顔から目を離した。

「あ……ごめん。」

ロザリオはあわててシトを地面におろした。

「うっん。……その……ありがとう……。」

「いや、礼を言われても……困っちゃうな……。」

「おいおい、照れ屋大会でもしてるのか？」

ティオはそんな二人をみて苦笑気味だった。

「何だよ？照れ屋大会ってのは。」

ロザリオはそんなティオをにらみつけるが、ティオは肩をすくめ、

「いや、今思いついた。」

と実に軽い口調で答えた。

「まったく。時々君のことが分らなくなるよ。……それより……。」

「ロザリオは軽くため息をつき、そして一面に広がる大地に目を向けた。」

「これは……まるで……。」

夕日の照らされ、赤茶けに広がる大地。

「ああ……これは……。」

そして、その大地に立てられた数え切れないほどの十字架。

その光景は正に……。

「……赤銅の墓標《brownish grave》……だな。」

ティオのつぶやきは一陣の風に舞い上がった砂埃の中に消えていった。

(5)

「赤銅の墓標……ですか。」

白み始めた窓の光が店内に差し込んできていた。

「ああ。あれはまるで墓場みたいだった。いや、実際墓場だったんだろうよ。」

男は空になったグラスの氷を弄んでいた。

「墓場って。いったい誰のなんぞ？」

氷とガラスのぶつかるカラカラという音が静かな店内に響く。

「誰か……。おそらくはあそこで死んだ奴らの全員だろうよ。炭坑夫、兵士、大人も子供も誰もかも。」

男はグラスをカウンターにおいた。

「……戦争……ですかい？」

「そういうことだろうよ。」

グラスの中の氷は解けて水へと変わっていく。

「まだ飲みやすい？」

マスターは新たなボトルを彼にみせるが、彼は首を振った。

「そろそろ飲みすぎだな。冷やをもらえるか？」

「わかりやした。」

マスターはカウンターのしたから水の入ったボトルを取り出し、グラスへと注ぎ込んだ。溶けかけた氷はカランカランという音をたてながら中で踊る。

「……あそこは墓場だ。死者の眠る墓場……この世で唯一安らかにいられる場所だった……。」

男はグラスを取り上げた。

さっきまで浮かんでいた氷はすっかり溶けてしまっていた。

夕日は墓標を照らしつけていた。

「やっぱりお墓なのかな？」

ロザリオは呟いた。

「そうだろうよ。それ以外に何があるってんだ？」

足場の悪い地面を踏み固めながら進むティオはどこかいらだたしげだった。

「……。」

シトは何も言わずにロザリオの後ろを歩いている。

「こんなにたくさん……。いったいつのものなんだろう。」

木と木の継ぎ目に縛り付けられた針金は既に真っ赤にさび付き、ちよつとふれただけでちぎれてしまいそうなくらいだった。

そして、その木も元は何の気だったのか分らないくらいぼろぼろになっている。

「10年やそこらのものじゃないよね。50年くらい経ってる感じだけ。」

ロザリオは近くにあった十字架にふれようとするが、

「ロザリオ……お前、本当に分らないで言ってるのか？」

その手は鋭い口調に遮られた。

ロザリオが前を向くとティオは足を止め、まっすぐと彼の目を見つめて……。いや、にらんでいた。

「ティオ？どうしたのさ？」

ロザリオにはティオがいらだっている理由が分らなかった。

「……50年前、いったい何があったってんだよ？それを考えれば答えは分かり切ってるはずだ。」

ティオは遠い空を見上げた。

隆々とそびえる山々は夕日の光を跳ね返し真っ赤に染まっている。それはまるで山が血に染まっているようだ。

「50年前……。なるほど……。」

ロザリオはすぐに思い立った。なんてことはない、ティオの言う通り答えなど初めから決まっているようなものだ。

「戦争か……。」

「そういうこつた。」

ティオは呟くときびすを返し、また歩き出した。

「……せんそうつて……なに……？」

二人の会話を不安な面持ちで聞いてたシトはロザリオの耳にそつと呟いた。

「50年ぐらい昔に起こつた戦争のことだよ。詳しくは知らないけど。その戦争のせいでこの世界はこんなにも荒廃してしまつたんだつて。」

ロザリオは少し顔をシトの方に向けると淡々とした口調で話した。

「……なんで……せんそうなんか。」

「分らない。その当時の記録がまるで残つてないからね。ただ戦争があつたつてことだけしか分らないんだ。」

その視線の先に映るのは山際に沈みかける燃えるような太陽のみ。

「そうだったんだ……。」

シトも空を見上げた。

太陽は何を思つて世界を見下ろしているのだろうか。赤々とした太陽は何も語らない。そこには無慈悲な静寂が漂うのみだった。

「結局、フレアストーンつてどこにあるんだろつ。」

携帯食をかじりながらロザリオはふと漏らした。

「それらしきもんはどこにもなさそうだな。」

シトの入れた紅茶を片手にティオは空を見上げた。

空には夜の暗闇に混じり、点々とした星々、そして、煌々たる光を放つ月が張り付いていた。

「……ないの？」

火の近くに腰を下ろすシトは二人の顔を眺めた。

「さあ、がセネタつてこともあり得るけど。」

ロザリオはシトから紅茶のお代わりを受け取るとシュガーをたっぷりを入れて口に運ぶ。

たき火の赤々とした光は三人を映し出す。それは、どこか幻のようにも感じられ、シトは少し不安になった。

「こんだけ真っ暗じゃあ探しようがねえからな。」

ティオはカップをおいた。

「・・・おかわり・・・いる？」

シトの言葉にティオは無言で断った。

「まあ。明日だね。」

冷めてきた夜の空気にロザリオは少し身震いをした。

「寒いのか？」

シトは自分が羽織っている毛布を差しだそうとするが、ロザリオは笑顔で引き留めた。

「これくらいは慣れっこさ。」

「でも・・・。」

シトはティオの顔を伺う。

「ブリタニアの冬はもっと厳しかったぜ。」

ティオの口調はぶっきらぼうだった。

「・・・。」

シトは訳も分らない感情に翻弄されていた。

「ティオ・・・。何で機嫌が悪いのかは聞かないけど。それはあんまり感心しないよ。」

諫めるようなロザリオの言葉もティオは聞かないふりをした。

「・・・何かあったら起こしな。明日も早い。」

ティオはまるでふて寝をするかのようにごろんと寝転がった。

「まったく・・・君らしくないね。ねえ、ティオ？言いたいことがあったら言ってくれよ。僕は君の相棒なんだからね。」

ロザリオはそれだけ言うときき火に向かい合った。

「シト、君も寝た方がいいよ。ティオの言うように明日も早いからさ。」

ロザリオは火にかけてあったポットをとると空になったマグカップにそれを注ぎ込んだ。暖かな湯気が一瞬彼の表情を覆い隠す。

「うん……。」

シトはどこか納得できない感情をもてあましながらも毛布で身を包んだ。

その暖かな感触は次第に彼女を微睡みのそこへと誘ってゆく。

「……スー……。」

しばらくすると心地よさそうな寝息がロザリオの耳に届いてきた。

「お休み……シト……。」

ロザリオはそう一言言うと、焚火に薪をくべると自分も寝そべった。

「……静かな夜だね……。」

世界は静寂に包まれた。

「……ロザリオ……。」

ティオは相棒の名を呼んだ。

「……ねたか？」

ティオの耳に聞こえてくるのは二人の奏でる穏やかな寝息だけだった。

「……すまない……。」

ティオはそう一言告げると、むつくりと身体を持ち上げた。

既に焚火の火も儂い光を放つのみとなっていた。

ティオはしばらくそれを眺め、おもむろに歩き出した。

彼の足音は静寂に沈む墓標のなかで妙にはっきりと響いた。

「やつぱりあんたか。」

焚火の光が届かない暗闇が支配する崖には一人の男がたたずんでいた。星と月の光を浴び、ティオをまっすぐと見つめるその瞳はどこか哀愁を漂わせていて……。

「よく分ったな。」

それはため息のような言葉だった。

「何となく。人の気配を読むのは得意なもんで。」

彼はおどけるような笑みを浮かべた。これも彼なりのポーカーフ

エイスだ。

「そうか……。」

男はそういうと星々の瞬く夜空を見上げた。

「ところで、何であんたがここに？ここに有る例のもんをとってこいつて言つたのはあんただぜ？そんなあんたが何でここに有るんだ？答えなよ、ロシナンテ。」

ティオは、彼、ロシナンテの方に歩み寄つた。

「いい夜だな。」

ロシナンテが答えたのはそれだけだつた。

「ああ。そうだな。むかつくぐらいいい夜だ。」

ティオはさらに一歩足を進める。

「儂はただほしかつたのじゃよ。」

西の空に沈みかけた月を眺めていた彼はふと口を開いた。

「何が？」

ティオとロシナンテとの距離は人間二人分ほどしかない。

「何か……それは儂にもわからなかつた。だがお主らがこの地に立つて分つたのかもしれん。」

「なにを？」

ティオは歩みを止めていた。

「いや、分つたと言うよりは気づいたという方が言葉としては誤りがないのかもしれんな。」

ロシナンテの声は儂い。

「俺は言葉遊びをしてんじゃねえ。」

ティオの口調は自然と荒々しくなつていた。

「儂は……死に場所を探していたのかもしれんな。」

ロシナンテはティオの方に表を向けた。

「死に場所？」

ティオは眉をひそめた。

「そつじや。今まで儂が生きてこれたのはここに儂の生涯の心の支え、フレアストーンがあつたからじゃと思つていた。しかし……。」

「ロシナンテは目を閉じた。その奥には今、何が映っているのだろうか。死んでいった仲間達か、去っていった家族なのか、それとも・・・」

「しかし、それは違ったのかもしれん。フレアストーンンは単なる鎖。この世界に儂を縛り付けていた鎖じゃったのかもしれん。」

「あんたは死にたかったのか？」

「分らぬ。自分のことながらそれすらも分らん。しかし・・・」

ロシナンテは再び空を見上げた。月は西の空に沈み、世界はさらなる闇に包まれていた。

「もう・・・楽になりたいと思う。いや、今までもそうじゃった。

もう、この世界にはなんの末練もない。儂には生きる術も希望も既になかったのじゃろうな。」

その言葉はどこか達観した雰囲気放っていた。

「そうか・・・やり残したことは何もない・・・ということか・・・」

ティオは懷に手をしのばせた。

「何も・・・ないな。やりたいことはすべて奪われていった。もう、これ以上失うものは何もない。」

ロシナンテは言い切った。

「覚悟はついているのか？」

ティオは懷のものを握りしめた。しかし、最後の言葉を聞かない限り、それを出すことはできなかった。

「・・・自分で自分を殺すことはできん。・・・じゃから・・・」

「いや、いい。」

そして、ティオは目をキツと見開き、懷から手を抜いた。

「それ以上はいわなくてもいい。俺がお前の願いを叶えよう。」

ティオの手にはさつきまでこの山に澄む悪夢を駆逐してきた銃が握られていた。

「・・・すまん。最後の最後までお前には迷惑をかける。」

ロシナンテはそういうと懷のポケット探り、何かを取り出し足下に置いた。

「これがフレアストーンじゃ。これをどうするかはお前達で決めてくれ。」

ティオは無言で頷いた。深い闇の中、それがロシナンテに分ったどうかは不明だった、しかし、ロシナンテは安心したようなため息を吐いた。

ようやく楽になれる。すべての柵から解放される。そんな安堵のため息だった。

「……さよならだ。」

ティオはただそれだけ告げるとトリガーを引き絞る。

妙に固く感じる引き金は彼が躊躇していることを示しているのだろうか。しかし、それでも彼は力を緩めることはなかった。

ロシナンテは目を閉じた。その奥に映るものは何だったのか。穏やかな笑みすらも浮かべる彼の表情からはそれすらも察することはできなかった。

ひとえに戦争というだけで降りかかってきた悲劇。そんな人生をただ生きるためだけに駆けめぐってきたもの。そして、最後には生きるのに疲れ、死を望むだけ。

「……!!」

そんな思いがティオの中で渦巻いた。

ティオはそれを断ち切るように、何も考えずただ指に力を入れた。

「……」

夜空に響く乾いた音はあまりにもあっけなかった。

「……」

一陣の冷たい風がティオの頬を駆け抜けていった。

「……」

そして、彼の目に映るのは穏やかな笑みを浮かべた老人だけだった。

「……バカ野郎だよ。……あんたは……バカ野郎だよ。……」

・なんで死ぬことを望んだんだ？生きていればきつといいことだつてあつただろうに……。なんでだよ。本当に死ぬべきなのは俺じやねえのかよ……。何で、あんたが死ななけりやいけねえんだよ……。なんで……。あんたを殺さなきゃならねえんだよ……。死んだ人間は何も答えない。静寂の漂う星空はあまりにも無慈悲だつた。

「あんたの生きた証……。」

ティオは足下に転がる石を拾い上げた。売れば街一つをまるごと変えてしまうほどの価値がある石。

「俺には重すぎる……。。」

ティオはそういうとその石をロシナンテのポケットにしまい込んだ。

「せめて安らかに眠んな。あんたの眠りを脅かすものはもうどこにもいやしねえ。あんたはもう何も奪われやしねえ。」

ティオはその骸をかかえた。

「これが、あんたが望んだ自由なんだな。」

「ティオ……。。」

彼の背後から声が響いた。

「……。起きていたのか。」

ティオは振り向かなかった。

「眠れなくて。」

そこに立っていたのは、ロザリオだつた。

「そうか……。。」

二人の間に沈黙が漂う。

「ねえ。」

その沈黙を破つたのはロザリオだつた。

「なんだ？」

「お墓……。立ててあげようよ……。ここだつたらゆつくりと休めるだろうから……。。」

再び沈黙が走る。

「そうだな……。それがいいな……。」

ティオは頷き、ロシナンテの亡骸をゆつくりと地面に横たえた。

「……人が死ぬのは嫌だなんて感情がまだ僕の中に残ってるなんてね。」

「……………」

「そんなこと思っえるような資格なんてないのに。」

ロザリオは穴を掘り始めた。

「いや。お前にはあるさ。」

ティオもそれを手伝う。

「そうなのかな……。そうだったらいいな……。」

ロザリオは空を見上げた。

「そうさ……。今の時代が間違ってるんだよ。こうでもしなければ生きていくことすらできねえ。」

「死にたくもなるってことか……。」

ロザリオは吐き出すようにいった。

「せめて一握りの希望さえあればいいんだ。それさえあれば人は生きていける……。どんなことがあってもな。生きていこうとする意志さえもてれば……。」

ロザリオはクスリと笑った。

「……………」

ティオは怪訝そうな顔でロザリオを見た。

「君に似合わない言葉だね。」

「やかましい……。」

夜はさらに更けていった。

(6)

「ん．．．．。」

シトは身震いするように目を覚ました。

「さむい．．．．。」

身体を包み込む毛布は朝の冷え込みには役に立たなかったらしい。

「．．．．あさ．．．．？」

突き刺さるような寒さは彼女の意識を次第に鮮明にさせていく。

「．．．．う．．．．。わたし．．．．どこ．．．．。」

毛布を固く身に引き寄せると彼女は周りを見回した。

「やま．．．．あ、そう．．．．。」

彼女は思い出した。自分はいま山の上の墓標にいるということを見る。と、ロザリオもティオもまだ眠りこけている。

焚火は既に白い灰となっていた。

「．．．．ん？なに．．．．。」

シトはふと違和感を感じた。昨日まではなかったものが視界にはいる。

「．．．．おほか？．．．．だれの？」

シトはゆっくりと身体を起こした。慣れない体勢で寝てしまったのか。身体の節々が悲鳴を上げている。

「．．．．．。」

シトは無言でその墓標の前に足を運んだ。

「えつと．．．．。」

その墓標には何か文字が刻まれていた。

『もう何も奪われない。せめて安らかな眠りを．．．．』

シトはその言葉を見つめた。

痺れるような寒さももう気にならない。心がはち切れそうな感情が彼女を揺さぶった。

「わたしは．．．．。」

毛布が地面に落ちた。

「見つけた……。」
声。

シトははじかれるように身を起こした。しかし、それは彼女の腕に伸びる手が阻む。

「……。！！」

シトは何とかそれをふりほどこうと必死にもがくが、力が違いすぎる。

「シト！！」

シトは振り向いた。

「おっと動くな。」

しかし、腕に走る鋭い痛みがそれを阻んだ。

「てめえ……。俺たちをつけてたやつか。」

シトの目に映るのは怒りにゆがんだティオの顔だった。

「そういうこつた。」

シトは自分のこめかみに何かが押しつけられていることにやっと気が付いた。それが黒光りする銃だということを理解するのにはしばらくの時間が経った。

「フレアストーンが目的なら僕らは持っていない。そもそもそんなものはここにはなかった。ガセネタだったんだ。」

ロザリオの声はシトの横から放たれていた。

「ふん。俺の目的はそんなもんじゃねえ。」

男はさらにきつくシトの腕をひねった。

「……。！！」

シトは訳も分らない痛みで悲鳴を上げる。

「なに？　どういうことだ？」

ティオはその銃を男に向けながら声を荒げた。

「何が目的なんだ？　僕らの命か？」

ロザリオも自分の銃を懐から出していた。

「だったら俺たちを見くびったな。1対2では明らかにこちらの有

利だ。」

ティオは男ににじり寄る。

「お前達に興味はない。なにせ、俺の目的はこのお嬢さん何でな！」
ティオもロザリオもシトと男に集中するあまり、崖の向こうから聞こえてくる音に気が向いていなかった。

鋭い旋風が墓標の砂をまいあげた。

「く！ちつくしょう！しまった！！」

ティオがそう叫んだ時には既に遅かった。

「はははは……。噂に聞いていた何でも屋がどんなもんかとおもったら。女一人を人質に取られて周りを見失うとはな。」

男は銃を持つ手で空から垂れ下がるロープをつかんだ。その先には……。

「飛行船？」

太陽を遮る雲のを思わせる白い飛行船が彼らを見下ろしていた。

「あばよ！もう会うこともねえだろうぜ。」

勝利の笑みを浮かべ、男は飛行船に乗り込んだ。シトをその脇に抱えて。

「ロザリオーーーー！ティオーーーー！」

シトの悲痛な声はティオに力を与えた。

「させねえ！！」

次の瞬間、ティオは崖から身を躍り出していた。

「ティオ！」

ロザリオも駆け出すが、その足は崖の端で止まってしまった。

「ロザリオ、ブリタニアだ。ブリタニアで待ってる。シトを連れ戻したらすぐに向かう。……ブリタニアで待っていてくれ。」

次第に遠ざかっていく飛行船、そしてティオの声。

ロザリオはただ呆然とそれを見守るだけだった。

エピローグ

エピローグ

氷の山が崩れ水の中に沈み込んだ。

「それで……。そのシトって女はさらわれたってわけですかい？」

男はグラスを回して氷を弄ぶ。

「そういうことだ。あれは完全に不意をつかれた。というより、俺たちがバカだったんだ。」

男はグラスを置くと、残り少なくなった煙草に火をつけた。

「いったいその女は何者だったんですか？」

マスターはカウンターに腰を下ろすと磨き立てのグラスを棚に戻した。

「俺も予想もなかったことだ。」

男は白い煙を深く吸い込み、そして吐き出した。

「それは……。」

マスターは男を凝視した。

「……時間のようだな。」

男はそんな視線をかわすように壁に掛けられた古い時計を見た。

「へえ、もうそんな時間でしたか。」

「そろそろ閉店だろう？」

男はグラスを空にするとマスターの前にそれを置いた。

「そりやそうですか……。」

マスターは煮え切らない面持ちでそれを受け取る。

「そういうわけだ。今日の残り分はツケで頼む。」

男はそう一言言うと、懐の有り金をすべてカウンターにおいた。

「いえ。残り分はあっしの奢りでいいですぜ。おもしれえ話も聞けたことですし。」

マスターはにやにやと笑いながらその金を勘定し始めた。

「奢りつていつてもたいした量じゃねえじゃねえか。」

男は苦笑すると掛けてあったコートを着込んだ。

「いえいえ。そうでもありやせんぜ。」

マスターは相変わらずにやにやした笑みを浮かべている。

「今日も寒くなりそうだ。」

コートのボタンを留めながら外を見た。

「ブリタニアの冬は厳しいですから。」

小銭がはねる音が店内に響いた。

「まだ秋も終わるか。」

最後に男は帽子を目深にかぶると入り口に足を運ぶ。

「またいらしてください。その時は話の続きでも。」

その言葉には応えずに男は店をでた。安っぽいドアベルの音が店内に響き渡った。

街には冬の木枯らし吹き荒れていた・・・。

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0797f/>

赤銅の墓標

2010年10月8日14時50分発行